新制國語讀本 卷三

新教授要目準據

375.9
To10
資料室

41452
教科書文庫
4
810
41-1941
~~20000~~
~~21595~~
200030
273

資料室
375.9
T010

昭和十三年二月一日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科實業學校國語科用

教科書文庫
4
810
41-1938
2000302734

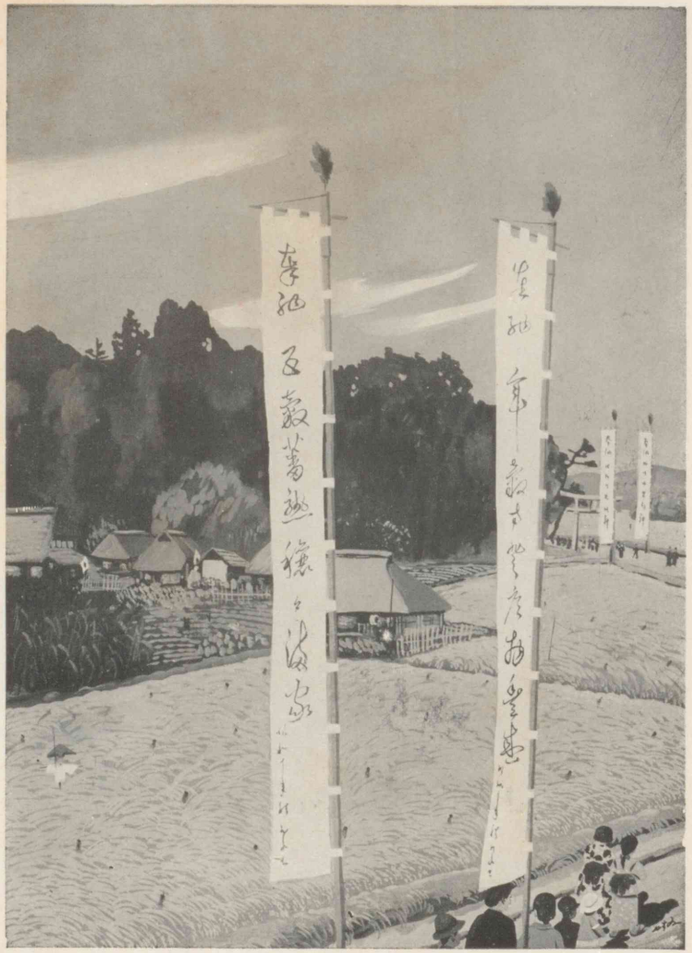
新制國語讀本 卷三

新教授要目準據

學習院教授 東條操編

東京
大阪 三省堂

広島大学図書
2000302734



鎭守の祭禮　（第十二課參照）

廣島大學圖書之印

廣島大學教育
21595
圖書

卷三目次

一 うてや鼓　島崎藤村　一
二 春の野外劇　横山桐郎　四
三 勿來の關　熊田葦城　一一
四 爽やかな心　河野省三　一五
五 樂訓　貝原益軒　二七
六 島四國　荻原井泉水　三〇
七 新綠の光　金子薫園　三六

八　杉田壹岐　室鳩巣　四二
九　オリンピック　山川建　五〇
一〇　最後まで　辰野保　五九
一一　日本人　西條八十　六三
一二　鎭守の森　笹川臨風　六六
一三　板倉重宗　新井白石　七一
一四　覺悟　嘉納治五郎　七五
一五　偉人野口英世の生家を訪ひて　土井晩翠　八一
一六　競爭と科學　丘淺次郎　九一
一七　夏の風趣　田山花袋　一〇五

一八　旅の今昔　石井滿　一一一
一九　空の旅　鈴木文史朗　一一七
二〇　膝栗毛　十返舍一九　一二五
二一　初學者のために　島崎藤村　一三〇
二二　趣味の日記　大谷繞石　一三八
二三　秋興　大木惇夫　一四五
一　秋のおとづれ　一四五
二　秋晝　一四六
二四　萩の家　落合直文　一四七
二五　宿の園生（諸家）　一五一

二六　大西郷の大度　勝海舟　一五三
二七　遺訓　西郷隆盛　一六〇
二八　五箇條の御誓文　徳冨猪一郎　一六三

——目次　終——

廣島大學圖書之印

新制國語讀本　卷三

島崎藤村
名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

一　うてや鼓

島崎藤村

うてや鼓の春の音、
雪にうもるゝ冬の日の、
かなしき夢はとざされて、
世は春の日とかはりけり。

ひけばこぞめの春霞、

もえ(萌)

かすみの幕をひきとぢて、
花と花とをぬふ絲は、
けさもえいでしあをやなぎ。

霞のまくをひきあけて、
春をうかゞふことなかれ、
花さきにほふ蔭をこそ、
春のうてなといふべけれ。

小蝶よ花にたはむれて、
優しき夢をみては舞ひ、

醉うて

醉うて羽袖もひら〳〵と、
はるの姿をまひねかし。

綠のはねのうぐひすよ、
梅の花笠ぬひそへて、
ゆめ靜なる春の日の、
しらべを高く歌へかし。

（藤村詩集）

横山桐郎
農學博士。東京市の人。昭和七年歿、年三十九。

サギゴケ

忠臣藏
假名手本忠臣藏、淨瑠璃の名作。竹田出雲等の作。

二　春の野外劇

横山桐郎

かりそめに轉(まろ)びし庭の枯芝に
　　青き芽見出で驚きしかな

寒い風が溫かくなり、日光がだん〳〵強さを增すと、自然は春の野外劇の準備に忙しくなる。

春空に囀る雲雀の歌と、日向の草土手に氣兼ねらしく咲くサギゴケなどの花にすがりついてゐる小虻の合唱に、野外劇の幕は引かれる。

それは年々同じ藝題をくり返すのだが、昔から今日まで忠臣藏が少しも廢らないやうに、幾度くり返されても、

蜜—密

少しも興味が減ることなく、いつも湧くやうな人氣である。

無論、その規模・演出の技巧、將又綿密さに於て、自然の野外劇は人間のそれとは比較にならぬ程優れてゐる。

何時、何處から生れ出たかと思はれる白地に黑い紋付の翅を持つた中形の蝶々が、さも樂しげにひら〳〵と、或は大根の花を求め、或は蜜を求め、或は鬼ごつこをして花の間を飛び廻つてゐる。野外劇の序幕はこの白蝶の舞踊に始まると言つてよからう。

しかし、白蝶は蝶の中でも最も平凡のものとして輕視され、その幼蟲の青蟲は、吾々の栽培する十字科植物の油

水スマシ

菜・大根等の葉を食ふ害蟲であるが、春のおとづれを告げる第一の使者として、私はこの蝶に敬意を拂ふものである。

冬の間は全く休業してゐた畔の小溝が、春の讃歌を合唱し始めると、それにつれて蟲界の名ダンサー水スマシは、眞先に得意のダンスを舞ひ始める。

すい〳〵と進み行く流れの上、葦や杭の立並んだ間に妙技を振つて、散歩の人の眼をひき止める。小豆大の黑光りのする身體の背には、陽が白く銀の豆のやうに光つて見える。彼等は流れに逆ひながら、さも身輕に水の面をくる〳〵と渦を卷いて走る。そして人の足音や、一寸

アメンボウ

物音がすると、眼にも留らぬ速さで廻り始め、更にひどく驚くと、ダンスをやめてあわてて水の中に潛つて行く。

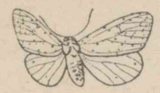
そして水底の木片や小石の下に潛り込んで、暫くじつと様子をうかゞひ、もう大丈夫と思ふと、又ついと水面に出てダンスを續ける。その敏捷な妙技は蟲界第一である。水面を走ることでは、アメンボウも一廉のチャンピオンには相違ないが、その技は水スマシに比べてはお話にならない。

長い冬眠から覺めた蜜蜂は、朝早くから花を訪ね、蜜と花粉とを集めて子孫を養ふべく奮鬪を始め、胡蜂（くまばち）の雌は隱れ家を出て、新しい家庭の建設に取りかゝる。花蜂は

くさむらに野鼠の巣を探して、おのが巣を營むべく活動を始め、大工蜂は枯杭に穴をほつて、子供の養育室を建て、壁屋蜂は泥を含んで、これ又育兒室を造る。

庭石の傍では、小蟻がせつせと細かい土塊をくはへ出して巣を造り始める。皆子孫のためにいそ〳〵として働いてゐる。

梅の若芽が伸び、桃の花の散つたあとから青い芽が顔を出して暫くすると、鮮やかな綠がいつしか灰色の網で包まれてしまふことがある。見ると、三分程の水色のいやらしい梅毛蟲が、うじや〳〵と群つてゐる。又裏庭に生えた蕗の葉が食ひ荒されてだいなしになつてゐるこ


ゴマダラヒトリ

草カゲロフ

ヒラタアブ

ともある。これは大抵灰色の長い毛を持つゴマダラヒトリといふ蛾の幼蟲の仕業である。

草花の莖にはアブラ蟲がうよ〳〵とたかつて盛んに子を產む。その間を黑蟻が徘徊して、アブラ蟲から蜜を貰ひ、代償として無力のアブラ蟲を保護する。さうして蟻の警戒の裏をくゞつて、草カゲロフやヒラタアブの幼蟲は、またこのアブラ蟲を食つて歩く。

春の樂園も、裏をのぞいて見ると恐しい生存競爭の大悲劇の舞臺である。生きる者、死ぬ者、食ふ者、食はれる者、それらの者が各〻生命を完うし、子孫の繁殖を計るべく奮鬪努力する樣は、蟲ながら實に敬服に値する。

路傍に、庭園に、蠢々として動く無心に見える小蟻の一擧一動にも、深い思慮と大きな意味が含まれてをり、花に寄り添ふ胡蝶の舞も、單純な悅樂ではない。生物界の生存競爭の大活劇は、先づ陽春三四月に幕を切つて落し、細かい蟲と蟲、蟲と植物との爭鬪に始まり、やがて幾千幾萬の蟲が續々と舞臺に現れて、各得意の演技をなすのである。その千態萬樣、十人十色の妙技の表現は、正に他の生物界に見られない興味がある。蟲の研究、それは詰らぬ仕事のやうだが、その底に潛む尊い教訓、深刻な諷刺は、假名手本忠臣藏以上に吾々の興味をそゝる。

（蟲の世界を探ねて）

三　勿來の關

熊田葦城

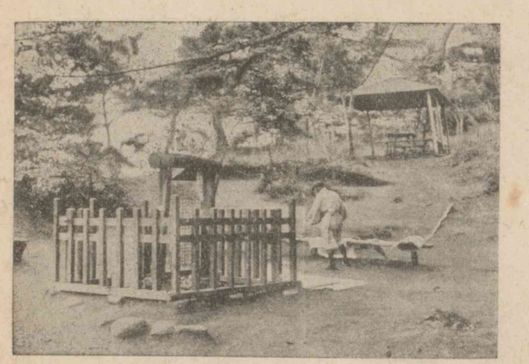
熊田葦城　著述家。福山市の人。文久三年（一五三）生。

勿來の關　磐城國（福島縣）の南境。今東北本線關本驛の附近にその址が在る。

模糊　見え。

源義家、出羽を治むること十年、國内靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京師に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々、また戰時の秋に似ず。行き〳〵て勿來の關に差掛かる。山上模糊として白きは雲か。地上繽紛として飜るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪



勿來關趾

兵馬倥偬
干戈

と思へるは散り來る櫻。關山春深きところ、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥偬の間にありては、月を見れども樂しからず、鳥を聞けども嬉しからず。今や干戈既に戢まりて、襟懐特に安し。

將軍駒を樹下に駐む

將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、兜も花、鎧も花、身は

なこそ
道もせに

長亭
短驛

いつしか畫中の人となる。逸興頓に湧きて詩情自ら動く。

吹く風をなこその關と思へども
道もせに散る山ざくらかな

一かへり二かへり、口吟みつゝ永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭・短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて、一門光を添ふ。來りて賀を述ぶる者、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る、「陸奥は名所多き國と聞く。年久しくかの地に在りたれば、皆それ〴〵に見あきらめつらむ。是のみこそ羨

ましき心地すれ。」と。義家畏りつゝ答ふ、「心長閑けく候はむには、ゆかしきことも候べけれど、軍事に暇なき身には優しき詠とても候はず。たゞ勿來の關と申す所にて花の散るさまの餘りに興深く、あはれ心あらむ人に見せまほしく覺え候ひしかば、其の儘に打過ぎなむも口惜しく、をこの口吟に任せて斯くなむ仕りぬ。」とて、かの「吹く風を」の歌を打誦すれば、「げにも秀歌をこそ致しつれ。」とて、感嘆特に淺からず。花は櫻木、人は武士。斯の人斯の花を詠じて花と人と千古に香ばし。

（日本史蹟）

覺え。

四 爽やかな心

河野省三

河野省三。文學博士。國文學者。國學院大學學長。埼玉縣の人。明治十五年生。

私どもは晴れた日に東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴れ〴〵した、みやびやかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひら〳〵と飜つてゐるのを見ますと、そこに活動的な生き〳〵とした氣分が起つてくるのであります。或はまたかの明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な參道を吸ひ込まれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿前に參り

聳え。

富士山

ますと、自ら清々しい尊い氣分につゝまれてくるのであります。更にまた松の緑の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御隆盛を思ひますと、なんともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。

これ等の神々しい清々しく晴れ〳〵しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い〳〵昔

から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純眞なる心は全く我が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髄であります。

かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち滿ちた心が、卽ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとくさわやかに
もたまほしきは心なりけり

とお詠みあそばされてありますが、その爽やかな心は、取

かやう。

穩—隱

りも直さずかやうな純にして直なる氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日々々の生活を營むに當りましても、最も必要な氣分であり、且價値のある態度は、まことにこの爽やかな心にあります。

この爽やかな心は晴れ〴〵しい廣い心持であります。徒らに物に屈託しないゆつたりとした心であり、またみだりに他を排斥しない穩やかな心であります。この心からして、かたよりのない、爽やかな氣分を味はふことができるのであります。

爽やかな心は、明快な裏表のない心持であります。溫味のある生き〳〵とした生活は、最も望ましい世の中であります。僞らない正直な態度は最も力强い生活であります。宗教の生命もまたこゝにあると信じますが、天眞爛漫は卽ち爽やかな心の本體であります。

爽やかな心は、かく清らかで溫味のある生き〳〵とした心持でありまして、建設的に、有意義に總べてのものを生かしてゆくところの積極的精神であります。所謂「朝日の豐榮昇る」氣分が、卽ちこの爽やかなる心の働きであります。

我々日本人は、かういふ爽やかな心を根柢といたしまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道德を形づくつて來たのであります。我が日本人の國民精神

柢—底

神道

竟―意

松阪　三重縣松阪市。

本居宣長　國學者。伊勢國（三重縣）の松阪の人。享和元年（一八〇一）歿、年七十二。

の現れである神道は、卽ちこの爽やかなる心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については色々の說がありますが、畢竟はこの爽やかな心、純眞な氣分に生きるところの日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に伊勢國松阪にあつて、天下の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長でありますが、その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人問はば
朝日に匂ふ山ざくら花

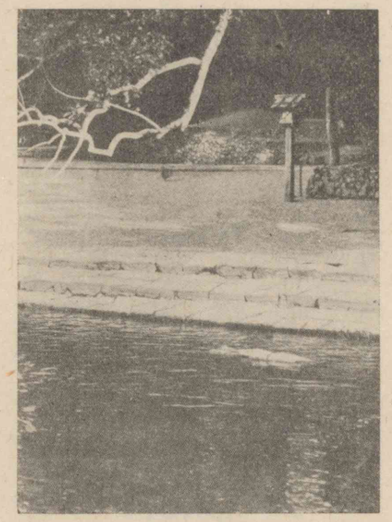
とありますが、この大和心も正しくこの爽やかな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であります。力を極めてこの日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを說いた人であります。さうしてひたすらに我が國家を愛する道を、力强く主張した人であります。

朝日に匂ふ山櫻花は、如何にも淸らかであり、さうして單純にさつぱりした眺めであります。嫌味とか毒々しいとかいふところのない、淸いみやびな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるの

かういふ

であります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明く、浄く、直き心とも申しまして、道徳の根柢となる心はこゝにあると信じてゐたのであります。

かゝる爽やかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびな心を心として、一途に我が皇室を尊び我が國家を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐることは明らかであります。



皇大神宮御手洗場

神社は我が神道を形に生かした經典で

五十鈴川
皇大神宮の社前を流れてゐる川。

西行法師
俗名は佐藤義清。建久元年（一一九〇）歿、年七十三。

宗教的の情操

ありまして、彼の鳥居といひ、鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、いづれも皆清浄簡素といふことを尚んでゐます。そこにお參りいたしますと、私たちの心は自ら清々しい爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に五十鈴川の清い流れに、二千年の昔から鎮座まします皇大神宮に詣りますと、何人も西行法師と同じやうに、

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに感ぜられる尊い心が、卽ち日本人の神に對するありのまゝの姿でありまして、最も氣品の高い宗教的の情操で

挿話

あります。

明治天皇の御製の中にも、

あさみどり澄みわたりたる大空の
廣きをおのが心ともがな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも清らかに爽やかな大御心をしのび奉らざるを得ないのであります。思へばもう十三年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それは明治天皇の御一年祭の行はれた時のことでした。ある小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式

が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔つたところに並びました老幼男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

その式に遲れた町民たちは、いづれも靜に榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳ぐらゐの八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて伏し拜みましたが、やがて徐ろに、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一禮して立去つたのであります。これを目擊しました私は、まことに涙ぐましい感にうたれたのであります。

ゐる。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない單純であつて、しかも清らかな大和心がたゝへられてゐるのであります。私たちはこの心を日々の生活にうつしまして、物を清らかにし、心を爽やかにして、僞らざる力強い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽やかな心を基礎とした生活を常に快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なるところに一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

（ラヂオ講演集）

五樂訓

貝原益軒

貝原益軒　名は篤信。儒者。筑前國（福岡縣）の人。正德四年（一七一四）歿、年八十五。

内の樂しみを本とし、耳目を以て外の樂しみを得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景氣のうるはしきを感ずれば、其の樂しみかぎりなし。此の樂しみ、朝夕つねに目の前に充ち滿ちて餘りあり。これを樂しめる人は、すなはち山水月花の主となりて、人にこひ求むるに及ばず、たからもて買ふにあらざれば、一錢を費さず、心にまかせて、恣にとりて用ふれども盡きず。つねに我が物として領すれども、人いさはず。如何となれば、山水風月の佳景は、もとより定れる主なければなり。

いさはず

かく天地の内、きはまりなき樂しみを知りて、樂しめる人は、富貴の驕樂をうらやまず。其の樂しみ富貴にまさればなり。此の樂しみを知らざる人は樂しむべき事、目の前に常に充ち滿ちて多けれど、其の樂しみを知らざれば樂しまず。世俗の樂しみは、其の樂しみいまだ止まざるに、はやくも我が身の苦しみとぞなれる。たとへば味はひよき物を貪りて、恣に飲み食へば、はじめは快しと雖も、やがて病おこり、身の苦しみとなれるが如し。凡そ世俗の樂しみは心を迷はし、身を傷ひ、人を苦しましむ。君子の樂しみは迷ひなくして心を養ふ。外物を以ていはば、月花を賞で、山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむの類、其の

いさむ

禮記　支那の古書の名。五經の一。

樂しみ淡ければ、終日樂しめども身にわざはひなく、人のとがめ、神のいさむるわざにあらず。此の樂しみ貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。志だにあれば、此の樂しみを得やすし。

君子・小人ともに樂しみを好むは人情なり。されども君子・小人の樂しみとするところ同じからず。禮記に、「君子は道にしたがふ事を樂しみ、小人は欲にしたがふ事を樂しむ。道を以て欲を制すれば、樂しんで亂れず、欲を以て道を忘るれば、みだれて樂しまず。」といへり。こゝを以て小人の樂しみはまことの樂しみにあらず。はては必ず苦しみとなる。

（樂訓）

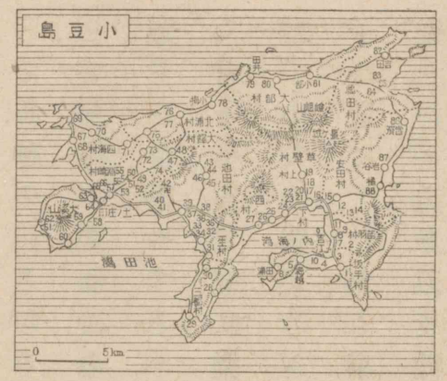
六島四國

荻原井泉水

荻原井泉水
名は藤吉。俳人。東京市の人。明治十七年生。

冴え。
聞え。

弘法大師
姓は佐伯氏、名は空海。眞言宗の開祖。讃岐國（香川縣）の人。承和二年（一八三五）寂、年六十二。



りん〳〵といふ冴えた音が、遙の山裾からこの山莊にまで聞える。それは、「お遍路さん」が振る鈴の音なのだ。——「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。——四國八十八箇所に殘された弘法大師の靈場を、遍歷して歩くのが、「お遍路さん」である。併し、如何に信仰のためとは言へ、四國を一周することは日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに

小豆島
瀬戸内海に在る島。香川縣小豆郡。

土庄港
小豆島の西南岸に在る港。

多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得ることとされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では、六七日かゝるといふことである。岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄港に着く。それから發足して第何番といふ札所の順に參詣の道をたどるのである。菅笠をかぶり、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分

お遍路さん

金剛杖　修驗者の携帶する白木の八角又は四角の杖。

の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、少いのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の様な海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道をたどつて行く。それは繪である、美しいことである。この山莊にまで聞えるりん〳〵と冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的ひまな四月頃、一番多く見受けると言ふことだ。この頃、島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體、遍路といふものが、何時の時代から始まつたものかは知らない

教へ

が、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信心を厚くする上からいつてもよいことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る所で愛せられる。また惠まれる。お遍路さん同士も亦お互に遍路であると云ふことのために信頼する、又扶助する。これが實に善い事だと思ふ。未知の人達が道連になつて親しんで行く、路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繫がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參ずるには、知識も修養

欺瞞

も資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも娘でも男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずる事に依つて、この尊い心持に一致することが出來るのだ。「南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出て來るのだ。これは實に美しい事だ。爭鬪と欺瞞とに滿ちたこの社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行き得る事ほど、美しい事が他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない、彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。

而してこのことは獨り彼等お遍路さんの上の事のみではない。私達は皆、人生の遍路である。銘々に自ら負

負うて

まづ。

はねばならぬ物を負うて、自分の名を書いた札を撒き散らしながら、自分々々の路を遍歴してゐるのである。しかも私達の周圍には、このお遍路さんに見る樣な信頼と扶助とが、果して行はれてゐるだらうか。——私は思ふ、私達はこのお遍路に學ばねばならない。遍路といふ行事をのこした弘法大師の暗示を感じなければならない。而して、人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達はまづお遍路さんの信と愛とを以て、人生を歩きたいものである。

（山水巡禮）

七 新緑の光

金子薫園

金子薫園 名は雄太郎。歌人。東京市の人。明治九年生。

季節の移り變りの目ざましさが、五月に入つて著しく感じられる。どんよりした暮春を送つて初夏の天地を迎へた心持は、新しい鮮やかな氣に滿たされる。見るもの、聞くものにつけて、すが〳〵しい感じが先に立つ。

暮春と薄日との對照は、習俗的のやうだが、よく其の氣持を表して居ると共に、初夏の陽光が新緑に照りはえる耀かしさは、やがて其の頃の快い氣分を惹き起すに十分である。新緑の若々しい色が黑ずんで來る晩夏には、誇の色が澱んで、あるに甲斐ないあはれを覺えしめる。木

對照

照りはえ。

の葉に新しい鮮やかな誇の色をもつてゐるのは、此の月の際やかな感じである。新緑に伴ふすべての物の象は、皆其の新しい氣持に同化させられる。

新緑に來て歌ふ鳥――其の動作を見ても、其の聲音を聞いても、若々しい緑色の氣分に同化されてゐることを感じよう。其の樹蔭に立つ人、樹蔭を行く人、生き〳〵した緑色に染められてゐるやうである。暮春の花なき頃の樹蔭を行く人の淋しみが、僅の間にかう生き〳〵して來ようとは思はれない。移り變る季節の、人に及ぼす力を、何かしら不可思議なものに想はせる。

暮春には、現實を隔てた遠いほのかな處がある。初夏

感じよう。

ゐるやう。

はさうでなく、最も現實味が勝つて居る。眠つてゐた、心が覺されて、明るい、かん〳〵した陽の下に置かれる。生くべく餘儀なくされてゐる中にも、努力を思はせる光がある。自然に快く誘はれて快く働くべき背景が、青く眼にひら〳〵と飜る。

初夏の頃の空の色、海の色は、新綠の同じ色彩で滿遍なく塗られてゐる。初夏の自然は、此の綠の色で持切つて居る。人は、行くも歸るも青い一路の單調に飽いて、見上げる空の色も青い、遠く眼をやる海の色も青い、かういふ中に人は何等かの異色を求めて來る。青い木の葉隱れに、或は青草に交つたりして、躑躅の花の紫を見るのは、色

聯關

眩しさう

の單調に飽いた眼に、ゆかしい感じを持たせる。此の花と初夏とには、趣味の最もよく聯關した所がある。其の紅いのにも、白いのにも、又黃ばんだのにも初夏の味はひがある。すつきりとして爽やかな處に、人を惹きつける趣があるのは、季節に合した、此の花の特殊な點である。

白い犬が新綠の蔭を行く其の姿にも、初夏の輕い自由な氣分が漂つてゐる。長くつゞいてゐる新綠の蔭は、ところどころ枝葉の粗い部分があつて、そこから陽の光が射して居る。そこへ來ると、犬は立止つて、陽の照る方を眩しさうに見る。かういふちよつとした景趣にも、初夏の靜な心持は出て居る。

漂うて

水のほとりに淺黃色の花が咲いて、うす青い流れに映つて居る。疲れたやうな蝶がだるさうに來る。蜻蛉がちよつと花に翅を觸れたかと思ふと、もう堤の上を飛んでゐる。蒸すやうな陽の光を受けて、何處まで飛んで行くであらう。若葉の匂、草のかをりが、そことなく漂うて來る。

一碗の薄茶を啜つて、午下の庭に薄い蔭をなして居る新綠の柔らかい光を見る時、落ちついた氣分にならせられる。ふいと桐の花の紫が落ちて聲をなした。鳥が隣の庭で頻りに啼いて居る。

古池の水が、續く晴にいやが上に減つて、魚が棲まなく

果てよう

なつた。杜若が一むら、ぴた〳〵してゐる淺い水に、青く快く伸びて、花をつける日も近づいて來た。古池のさびしさが、初夏らしくさつぱり飾られてゐるのを見た時の感じは、ちよつとしたものではあるが、やはり此の月の有する特別の氣持である。

新しく物の興らうとする抑へがたい光が、春の果てようとする空に動いて、それが擴がつて初夏になる。四月の末から五月の初にかけて、野原などを歩いてゐる時、ふと見上げる空にかうした心持の閃くのを認めよう。自然の研究者は、特に此の移り變りの姿を靜觀して、それから新たなる氣分を呼ぶことを忘れてはならぬ。（自然と愛）

室鳩巣　名は直清。徳川幕府の儒官。江戸の人。享保十九年（一七三四）歿、年七十七。

寛永　第百七代後水尾天皇の御代。

越前守　忠直。家康の第二子秀康の子。大阪夏の陣に發奮して先登の功があつたが、放縱で國務を見ず亂行に陷つたので、後流された。

登庸

顏を冒す

匡救す

晡時

八杉田壹岐

室鳩巣

寛永の頃、越前故伊豫守殿の家老に杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、その身の材をもて微賤より登庸せられ、厚祿を受け國老に列しけり。伊豫守殿參勤にて、一年在江戸のうち費用過分なりしを、常に前年よりしたくして、用度足る樣にしけるは、偏に壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顏を冒し直言して、君の過を匡救する事を忘れず。

或時伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及びて歸城あり。家老どもに對して、「今日若者どものはたらき、いつにすぐれて見えき。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りて、何れも喜び候へ。」とありしかば、家老ども何れも、「御家の爲何よりめでたき御事にて候。」と言ひしに、壹岐一人末座にありけるが、默々としてゐたりしを、何とぞ言ふかと暫く見合せられしが、こらへかねられ、「壹岐は何と思ふ。」とありしに、その時壹岐「只今の御意承り候に、憚りながら慨かはしき御事に存じ候。當時士ども、御鷹野などの御供に出で候とては、さきにて御手討なり候はむも計り難く候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。斯樣に上を疎み候うて、思ひつき奉らず候うては、萬一の時御候うて

用に立つべしとも存ぜられず候。それを御承知なく、たのもしく思召さるとの御意こそ、愚かなる御事にて候へ。」と言ひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀持ちて側にゐたりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」と言ふ。壹岐聞きて、その人をはたとにらみ、「何れもは御鷹野の御供して、猪・猿を追うて駈廻るを御奉公とす。この壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」とて、そのまゝ脇差を拔いて後ろへ投げ捨て、伊豫守殿の側に進み寄り、「唯御手討にあそばされ候へ。空しくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はむよりは、只今御手にかゝり候はば、せめて御恩を報

御氣さき

じ奉る志のしるしと存じ候はむ。」と言ひて、頸を延べて平伏しけるを見給ひて、何とも言はで、奥へ入られけり。

そのあとにて、前の家老ども壹岐に向ひて、「御爲を思ひて申されしは尤もにて候へども、をりもあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきを折られ候事は、遠慮もあるべき事にこそ。」と言ひしを、壹岐「君へ諫を申し上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よきをりとてはなきものにて候。今日はよきついでとこそ存じ候へ。その上某事は、御取立の者にて候へば、各〻とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても、その分の事にて候。」と言ひければ、諸家老各〻感じ合ひけり。

糟糠の妻

黄泉の下

さて家に歸りつゝ、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日比糟糠の妻のありけるに向ひて、「そこ許に言ひおく事唯一つあり。御身は女の身なれば、ぢきに御恩を受けたるにてはなけれども、我御厚恩を擔ふ故に、足輕の妻と言はれし身が、今歴々の妻とて、大勢の所從に圍繞せらるゝは、限りなき御恩にあらずや。然れば我生害仰せ附けられし後にても、唯朝夕、今までの御恩の有難かりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。若し女心にて、我が身のものうきにつけて、上を怨み奉る樣なる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべし。」と言ひけり。

思うて

秀康
關ヶ原役後、越前六十七萬石の領主となつた。慶長十二年（一六〇七）歿、年三十四。

さて今やと待ちけるに、夜更くる程に人來て門を敲きしが、「召あるまゝ登城すべし。」となり。さてこそと思ひて登城しけるに、すぐに寢所に召入れて、「その方が晝言ひし事心に掛りて寢られぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。我があやまりたる事は、とかく言ふに及ばず。その方が志を深く感じ思うて滿足す。」との事にて、ぢきに腰の物を賜りしかば、壹岐も思ひも寄らぬ事にて、覺えず涙に咽びつゝ、拜賜して罷り出でけるとぞ。

これにつけても思ひ出づるは、同じ越前家の話なり。秀康封に就きし後、阿閉掃部といへる武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。その頃、狛伊勢（こまいせ）とて世祿の

歴々なりしが、嫡子の鎧着初の式に、掃部を招待して、當年の武功の物語を望まれければ、掃部默し難く、「さらば、某一生のうちに、武者ぶりの見事なる士を一人見申して候。その事を話し申すべし。江州賤ヶ嶽の戰に、暮方に某一騎、余吾の湖のわたりを引返し候ひしに、敵と思しき者うしろより聲を掛け、『御不承ながら御相手を。』と進み寄り候故、こなたも望む所と、互に馬を乘放ち、既に槍を合せむとしけるに、その人『しばし御待ち候

賤ヶ嶽　滋賀縣伊香郡に在る山。賤ヶ嶽の戰は天正十一年（一五八三）羽柴秀吉が柴田勝家を破つた戰。

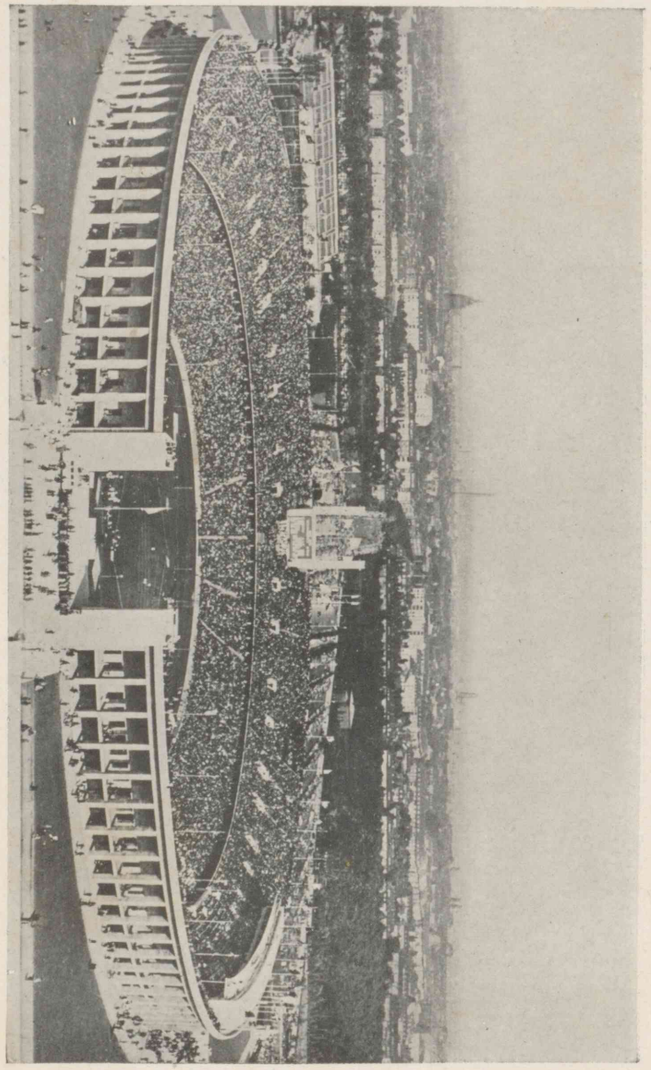
余吾の湖　同縣伊香郡余吳村の西、賤ヶ嶽の東北麓に在る。

余吾の湖

洗ひてこそ

へ。今朝よりの戰に我が槍よごれて候まゝ、洗ひてこそ。』と申し、湖水に槍をうち浸して二三遍洗ひつゝ、『さらば。』とて突き合ひしが、久しく勝負なかりし程に日も暮果てければ、彼方よりまた聲を掛け、『もはや槍先も見えず候。御殘り多くは候へども、これまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衞と申す者にて候。』とて、某が名をも聞き、互に後日を約して立別れしが、これ程見事なる武士は終に見侍らず。」と語りけり。をりしも伊勢が許に出入する方齋といへる浪士こそ、かの新兵衞にてありければ、これも厚く召抱へられけりとなむ。

（駿臺雜話）



（シリルベ）　昭和一十年第一十回オリンピック大會場技競全景

山川　建
文部省專門學務局長。東京市の人。明治二十五年生。

九　オリンピック

山川　建

現在の國際オリンピック大會は、その昔古代ギリシヤで行はれたオリンピック祭を一八九四年に佛蘭西の教育家クーベルタン男爵が再興したものであるから、これを現代（モダーン）オリンピックと云ひ、古代（エンシエント）のを古代オリンピックと稱へてゐる。

古代オリンピックは、ギリシヤの主神ゼウス（ゼウス）の神靈を慰める爲に毎四年に一回神前の庭でオリンピック祭を

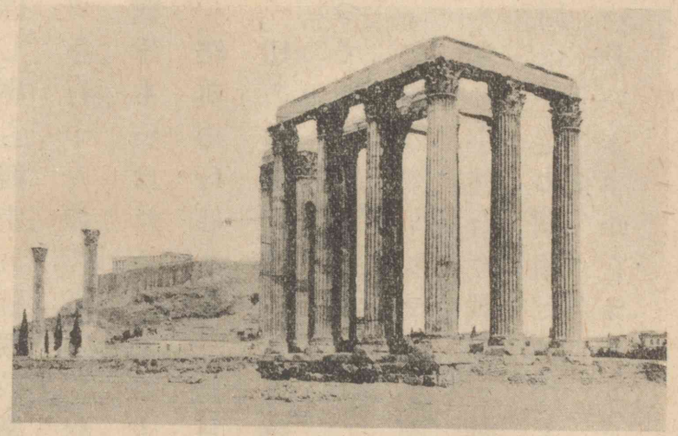
レスリング　我が國の相撲及び柔道に似た競技。

五種競技　走巾跳・槍投・二百米・圓盤投・千五百米の五種の競技。

絶え。

催し、專ら競走・五種競技・拳闘・レスリング等の如きスポーツを行つたのであるが、尙その外に音樂・美術・辯論などの競爭も行はれた。この大祭は大抵夏季に行はれたもので、祭典の行はれる一箇月の間は、ギリシヤ全土に亙つて、一切の爭闘を禁止して、絶對の平和が保たれるやうになつてゐたのである。

當時のギリシヤは小國分立し、互に國力擴張に餘念なく、常に小競合や戰爭が絶えなかつた。そこで四年に一回は一定の期間だけでも闘爭を止め、平和の氣分を得たいといふ事から、オリンピック大祭が行はれたとも謂はれてゐる。



オリンピアの廢墟

ともかく、オリンピック大祭にはギリシャ全土から、各國それ〴〵代表的の選手を出して、盛んに競技を行ひ、その期間は全ギリシャに平和の氣分が漲つてゐた。この時若し爭鬪を敢てするものがあれば、神慮に逆ふものとして、嚴しい制裁をうけたことは、事實である。スポーツによる爭ひは行はれたが、國

家間若しくは個人間の爭議は絶對に禁止されたといふのは一種の心理的妙味を含んでゐる。また競技に對する態度は極めて眞面目で、選手に選ばれる者は、競技の達人であると同時に、品性や人格も立派でなければならず、また體格も强健壯美であつて、謂はば總べての點に於て代表的青年であつた。そしてその選定權は官吏に屬してゐたといふのも面白い事である。

また競技の行ひ方は頗る眞劍で、體力の盡くるまで、氣力の果てるまで、熱心に爭つたもので、拳鬪などでは、死に到るまで戰つた者もあつた。何しろ今日の如く競技のやり方が科學的に考へられたものでもなく、また人情は

陋劣

フェアープレー　堂々たる勝負。立派な技。

オリーヴの冠

自ら殺伐であつたから、行く所まで行くやうなはげしい競技が行はれたのである。

しかし、當時に於ても卑怯な振舞や陋劣な手段は堅く戒められ、謂はゆる正々堂々の陣を布いて、全力を傾けて相競ふといふフェアープレーの精神は既に發揮されてゐたのである。

かくの如くであるから、競技に優勝した者は、絶大の名譽を負ふは謂ふまでもなく、その名聲はギリシヤ全土に響きわたるのである。しかし、これを表彰する方法は極めて精神的で、神前に植ゑてあるオリーヴの葉で作つた冠が授けられるに過ぎなかつた。決して物質的の褒賞

アマチュアースポーツ　非職業的競技。

功利的

しよう。

を授けることはない。こゝにも今日のアマチュアースポーツの精神が輝いてゐたのである。かく古代オリンピックは、神にさゝげる神聖な祭典としてギリシヤ民族の平和的施設として、また純眞なるスポーツ精神の發揚として、將又堅實なる心身鍛錬の試煉として、誠に意義深きものであつたことはいふまでもない。

しかし、その後ローマ時代に入ると、ローマ人の功利的の氣分からスポーツを何とか社會上に利益的に役立つものにしようと考へ、遂に見せ物にしてこれを觀て樂しむといふ風になり、隨つてスポーツの職業化・興行化が盛んに行はれ、外觀的に盛大を極めたが、眞のスポーツ精神

超え。

は腐敗し、純眞なる青年の心身鍛錬の美風は地に墮ちてしまつた。その結果はいふまでもなくスポーツの廢滅を導き、またオリンピックゲームスも中止の止むなきに至つたのである。

この消息は吾々に一つの大きな暗示を與へる。それは、卽ち、スポーツの發達は、決してローマの職業化まで導いてはならぬといふこと、どこまでもギリシヤの純眞なるアマチュア"スポーツの限度を超えてはならぬといふことである。何事にも氣の早い日本人は、アマチュア"スポーツが完全に建設されないうちに、はや既にスポーツ職業化・興行化の弊風を釀しつゝあるのである。大いに

スポーツマンシップ　運動家のもつべき明朗な堂々たる行動・精神。

オリンピックのマーク

戒むべき事と思ふ。

現代のオリンピックは、前にも述べたやうに、一八九四年に再興されたのであるが、その精神はギリシヤ時代のオリンピック精神に準じたことは謂ふまでもない。また毎四年に一回行はれることも同様である。卽ちアマチュア"スポーツの確立とフェア"プレーに依る競技の普及と、そして純眞なるスポーツマンシップを通しての國際親善とが大眼目となつてゐるのである。

現にオリンピックのマークとされてゐる五つの輪の連鎖は、よくこの精神を表象してゐるのであつて、五つの輪は世界の五大洲を象り、五大洲に在る各國民が仲よく

手を聯ねて行くべきことを示してゐる。また五つの輪にはいろ〳〵色がついてゐて、亞細亞は黃色、亞米利加は青、歐羅巴は綠、オーストラリアは紅、アフリカは黑といふ意味だと謂はれてゐる。而も一つ〳〵の圓輪は、明朗快活、純眞無垢にしてスポーツの精神に相通ずるところがあるのである。

（學士會月報）

次の文より形容詞を選べ

イ、御社殿前に參りますと自ら淸々しい尊い氣分につゝまれる（一五頁）

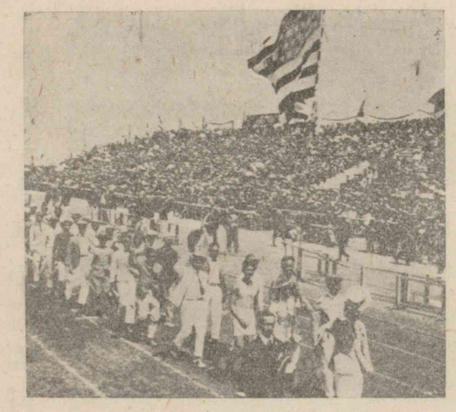
ロ、白い犬が新綠の蔭を行く其の姿にも初夏の輕い自由な氣分が漂つてゐる（三九頁）

一〇　最後まで

辰野・保

大正十二年五月、日・華・比三國の極東選手權競技大會が大阪で開かれました。

日本軍の勢ひ物凄く、既に優勝は確實でありましたが、最後の日に愈〻呼物の廿六哩マラソン競走が行はれました。此の競走に參加した一人に、岡山縣の長谷川照治といふ青年がありました。其の日は雨上りの實に蒸暑い日でした。正



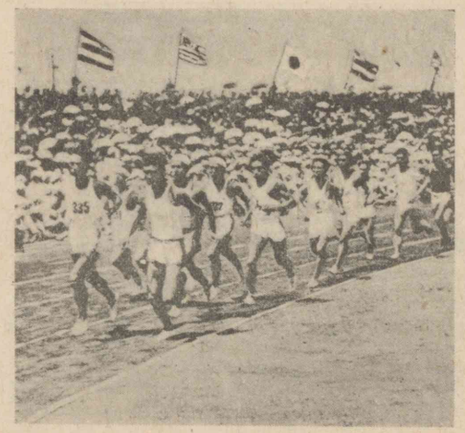
入場式

辰野保　大日本體育協會役員。東京市の人。明治二十一年生。

開かれました

行はれました

午競技場にスタートを切つてから、長谷川君は地方青年に見る一本氣の眞面目さで、常に先頭を切つて、廿六哩の長いコースを見事に走破しました。そして、萬雷の如き歡呼の中に、今や競技場に歸つて來ました。然し不幸にして、其の時は既に此の勇者は殆ど精力を消耗し盡して、視力さへも失つたかのやうでありました。其の中に、彼は場内のトラックの半ばごろまで來ますと、俄に氣を失つて其の場に打仆れてしま



二十六哩競走

ひました。折角こゝまで先頭を切つて來たものをと、場を埋めた何萬の觀衆は、あと三百米ばかりに迫つた決勝點まで、何とかして彼を再び起して走らせようとして、狂氣の如くなつて、或は其の名を呼び、或は柵外より聲援をしましても、國際競技規則によつて、競技者の身體に觸れる事を絶對に禁じられてゐます以上、仆れ臥した長谷川君を再び起して走らせる方法は、到底見出し得べくもなかつたのであります。恰度其の時であります。當時の役員の一人、野口源三郎君は走り寄つて、一本の日の丸の小旗を取り來り、これを柵の中から仆れた長谷川君の眼の前に持つて行つて、「長谷川君、日本のためにやつてくれ。」

禁じられて

野口源三郎
現在は東京高等師範學校教授。

指される。
振られた

といひながら、一振り振つたのでした。すると、今まで全く生氣を失つてゐた長谷川選手は、すつくと起き上りました。そして後は、野口君の日の丸の旗で指される方にとぼ〳〵と走り出したではありませんか。見物人は此の悲壯な光景を見て、ほんたうに泣きました。彼は又仆れた。再び日の丸の旗は振られた。又彼は起き上つた。そして三度仆れて、竟に彼は決勝點に入つたのであります。何萬の觀衆は、皆面を上げてよく此の光景を正視する者はありませんでした。我々は今日も尙其の當時を偲ぶと、眼の底が熱くなるやうに感じます。我々は其の日、其處に眞の日本を見たのでありました。（スポーツ隨筆）

西條八十
詩人。早稲田大學教授。東京市の人。明治二十五年生。

さはれ

一一 日本人

西條八十

心地よき名や「日本人。」
文字は短したゞ三語。
さはれこの名を呼ばふ時、
身にしみ〴〵と傳ひ來る。
わが感激のあやしさよ。

心地よき名や「日本人。」
短き文字を誦する時、
歴史は遠し三千年、

さいじ（最爾）

祖先の遺烈一瞬に、
わが肉身をやくを見る。

心地よき名や「日本人。」
住むは、さいじの一島嶼。
成すは世界の大經綸。
西歐に闇せまる時、
東亞にかざす大燈明。

心地よき名や「日本人。」

あゝこの語こそとこしへに、
正義と愛の象徴ぞ。
あゝこの語こそ盡未來、
進取と意氣の典型ぞ。

心地よき名や「日本人。」
われらこの名をうたふ時
四隣をめぐる青海波、
この皇國に生れたる
われらの幸を祝福す。

（國民詩集）

笹川臨風
名は種郎。文學博士。國文學者。東京市の人。明治三年生。

瑞籬

三　鎭守の森

笹川臨風

滿目蕭條として、田も畠も霜枯の風情見るかげもなき間に、一むらこんもりとして綠鬱蒼たるものは鎭守の森なり。金も石も爍けんばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて社前の注連繩さら〳〵と鳴れば、こゝは村人等の安樂世界となりて、拜殿に晝寢の夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿紅に染めいでて、夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松・杉小暗く茂りて、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣ひとりこゝに饒にして、何事のおはしますかは知らねども、神々しく覺ゆるなり。

鹿島神宮
官幣大社。茨城縣鹿島郡鹿島町に在る。武甕槌神に經津主神・天兒屋根命を配祀してある。

日落ちて、月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎭守の森は舞蹈場と化するなり。祠頭の旗幟翩翻として風に靡く時、一村の老幼往還織るが如く、鎭守の祭禮は、一歲中復と得がたき歡樂なり。年豐なれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎭守の森は一村の望を集め、一鄕の中心として、神聖なる、而も面白き所たるなり。

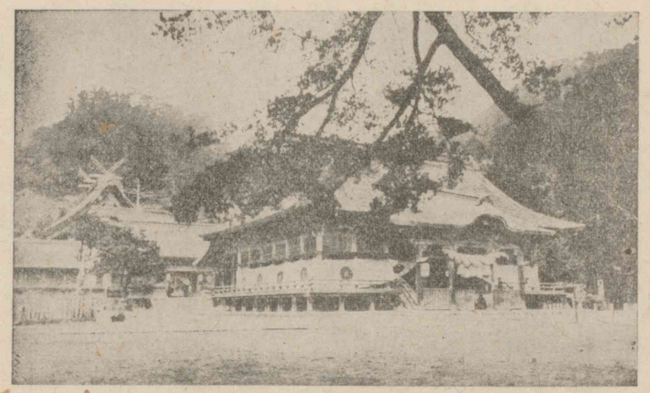
かゝる鎭守の森にいます神は、多くはその土地、その土着の民と、何等かの關係あり。溯りてこれを考ふれば、氏族・部民がその祖先を祀りたるもの少からず。諸國に鎭座し給ふ神社は、畢竟鎭守の森の大いなるものなり。鹿

香取神宮。官幣大社。千葉縣香取郡香取町に在る。經津主神に比賣大神・天兒屋根命を配祀してある。武甕槌神。

宇都宮二荒神社。國幣中社。宇都宮市に在る。豐城入彥命を祀る。

毛野君豐城入彥命の子孫。

出雲大社。官幣大社。島根縣簸川郡大社町に在る。大國主神を祀る。



出雲大社

島・香取の神宮は經津主神・武甕槌神を祀り藤原氏により尊信せられ、宇都宮二荒神社は、毛野君の一族がその祖先を祀れる所なり。その一層大いなるものには出雲大社あり。その最も大いにして、日本の鎭守たるものには、五十鈴川の上に宮柱太しき立て、千木高知ります伊勢大神宮あらせ給ふなり。

これを小にしては、一村の中心にして、これを大にすれば、帝國の中心たり。祖先の神靈、前賢の精魂は、長へに鎭守の社に留りて、子孫・後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵自進せしむべし。天祐神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり。而も信仰とは權道にあらず、方便にあらずして、直ちに神に接し、靈に感ずる唯一の法なり。祖先崇拜なるかな。これひとり原始の觀念のみにあらず、祖先の功勳は後人奮勵の龜鑑たり、子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑たり。たゞその崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回顧的たらしむる勿れ。進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

こゝに於てか、鎭守の森をして、一層、一村一鄕の中心た

風化

るの實あらしむべきなり。鎭守の森をして、更に神さびて神靈の窟屋たるに適せしむべきなり。これが爲には苗樹を植ゑ、草萊を除き、祠宇を修め、園池を美にし、以て一村一鄕の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき村人にも美の觀念を與ふる處、他に向つて誇とする處、異鄕に在りても猶戀々の思ひあるべき處たらしむべし。小學兒童の運動會もこれを中心として、この附近に行はしむべし。小なる村落圖書館の如きも、その附近に設けらるれば尤も妙なるべし。鎭守の森をして一村一鄕の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得る所極めて大なるものあらん。

新井白石
名は君美。儒者。江戸の人。享保十年(一七二五)歿、年六十九。

板倉重宗
德川幕府の諸侯。元和六年(一六二〇)京都所司代となる。明暦二年(一六五六)歿、年七十。

愛宕の神
火產靈の神をいふ。京都市の西北にある愛宕山上の愛宕神社の祭神。

一三 板倉重宗

新井白石

板倉周防守重宗は勝重が嫡男なり。此の人職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にして遙に拜することありて決斷所に至る。此處には茶臼一つを据ゑ置き、明障子を引立ててその内に坐し、手づから茶ひきながら訴を聞き分つ。人皆此の事どもを不審しあへり。されども、問ふことも得ならず。遙に年經て後、問ふ人ありしに、答へて曰く、「先づ決斷所に出づる時に、西面の廊下にて拜する事は、愛宕の神を拜するなり。多くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きし程に所願ありて

かくは拜しぬ。其の所願といふは、今日重宗が訴を斷らむに、心に及ばむ程は私の事あらじ、若し過ちて私の事あらむには、立所に命を召され候へ、年頃深く賴みまゐらする上は、少しも私心あらむには世に永らへさせ給ふなと日毎に祈誓するにて候。また訴を判つことの明らかならぬは、我が心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は、自ら動かさざらむやうこそあらめど、重宗それ迄の事は叶ひ難し。たゞ我が心の動くと靜なるとを試みるには、茶をひきて知る。心定りて靜なる時は、手もそれに應じて磨の環ること平かにして、軋られて落つる所の茶、如何にもこまかなり。茶のこまかに落つる時に至

りて、我が心も動かぬと知り、其の後漸くに訴を判つ。また明障子を隔てて訴を聞くことは、凡そ人の面貌を見るに、憎さげなると憐がましきとあり、誠しきあり、かたましきあり、其の品多くしていくらといふ數を知らず。見る所の誠しきと思ふ人のいふ事は誠と聞かれ、かたましきと見ゆる人のなす事は、何にても皆詐と見ゆ。又、憐がましき人の訴は、曲げられたる所あるよと思はれ、憎さげなる人の爭は、僻事ならむと覺ゆ。此等の類は、我が目に見る所に心の移されて、彼が言葉を出さぬ中に、はや我が心の中に、邪ならむ、正しからむ、曲ならむ、直からむと思ひ定むる程に、訴の言葉を聞くに至りては、我が思ふ方に其の

事聞きなすこと多し。訴のなるに及びては、憐がましきに憎むべきあり、憎さげなるにあはれなるあり、誠しきに僞りかたましきが多きこと、此の類殊に多し。人の心の知り難き、容を以て定めむこと叶ふべからず。古の訴を聞くには、色を以て聽くことあり、それは覆はるゝ所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所につきて心覆はるゝ事多し。又さなきだに訟の庭に出でむには恐しかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、眩ゆくいぶせくて、自らいふべき事も得いはで、罪にも科にもあふ人あらむと思へば、所詮、互に面を見も見られもせぬには若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候。」と答へしとなり。

（藩翰譜）

嘉納治五郎
教育家。兵庫縣の人。昭和十三年歿。年七九。

一四 覺悟

嘉納治五郎

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸此の如く、草木此の如く、人間亦此の如し。されば人として禽獸草木と異らんと欲せば、生れがひある人とならんことを要す。予が前途有爲の諸子に向つて望むものは何ぞ。

人生れて呱々の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず、これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の道を知らず、ただ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此の間晝夜を

呱々
鴻恩

黑白を辨ず
誨ふ
至尊
福祉

問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が成長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。これに次ぐに師長の恩あり、我等が纔に黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に說くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨立する基礎を成さしむる者は、我等が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家の恩あり、至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は、生民の安寧を維持し、その福祉を

不逞
薰陶
亂離塗炭
懶惰

增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母・師長をして我等に對する慈愛薰陶の務めを完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。然らずんば我等は亂離塗炭の苦しみに陷らん。我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て、此等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。

然れども、人或はその修養の時期に當りて、懶惰・遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒らに長じて、當に自營自活以てわが生育の恩に酬ゆべき時に至るも、無爲無能、その父母の恩に酬ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆる

醉生夢死
蠹賊

稗益

流風遺韻

こと能はざる者あり。況や至尊及び國家の鴻恩に對ふることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なる者なり。

又その無能かくまで甚しきに至らず、何等か一種の事に從ひ、國家に對して多少の稗益をなし、以て自活の道を求め、纔に父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、これを前の醉生夢死する者に比すれば、勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは、些か自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に德し、その流

天賦
畢生
酬い。

風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善用し、利用し、その畢生の事業は、以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを、長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實にこれに外ならず。

それ生きて一鄉の爲に功ある者は、死して一鄉の爲に惜しまれ、一郡の爲に盡せる者は、一郡の爲に哀しまる。

闔國民

遼遠

悼惜

若しそれその事業國家全體の進歩を助成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝ者に至りては、その事業の何たるを問はず、その人の存否は、國家の進運に關すること甚だ大なり。故にその人一度逝くや國を擧げてこれを惜しまざるはなし。嗚呼、天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるゝ者果して幾人かある。

少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は卽ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人となならんとするか、一鄉・一郡の爲に惜しまるゝ人となならんとするか、抑亦擧國の悼惜を受くる士となならんと欲するか。（國士）

土井晩翠
第二高等學校名譽教授・詩人。仙臺市の人。明治四年生。

半年前
昭和五年六月。

喧傳

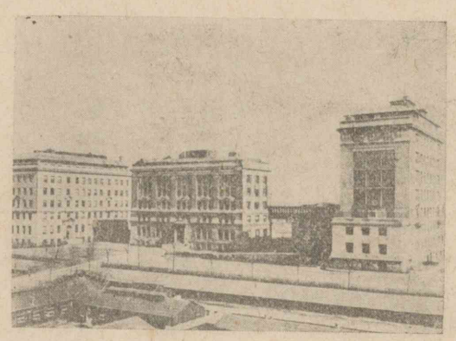
一五 偉人野口英世の生家を訪ひて

土井晩翠

東京朝日新聞に「世界人の横顔」の第十六回に野口英世のそれが、北島博士の筆で面白く書かれたのを讀んだのは半年前である。甚だ漠然としてゐる言葉だが「世界人」とは文明世界一般に廣く知られてゐる偉人といふ意味であらう。但し名が喧傳すると共に眞に世界の文化に貢獻して多大の恩惠を施し、

野口英世

その報として眞に受くべき光榮を世界から受けた人なら一層ありがたい、文字通りにも有難い、野口は正にかゝる種類の世界人で、日本のために萬丈の光焰を發揮した人――日本國が世界の學界に誇るに足る大學者――日本人種優良の現證を示して、日本人の自重心・自信力を高める好箇の活教訓である。



ロックフェラー研究所

一九二八年(昭和三年)五月二十一日、西アフリカのゴールドコースト州アクラ港で研究中の黄熱病にかゝり、殉道の死を遂げた時は全世界が哀

哀悼

悼した。ロックフェラー研究所は「古今を通じて最大の細菌學者の一人」と賛した。アメリカの議會はその名において弔意を表し、「十九世紀より二十世紀にわたつての世界の三大醫學者の一人」と稱した。

彼が古今を通じて日本の生める最大人物の一であることは明々白々である。一九一三年オーストリーのウインで、萬有科學大會第八十五回が開かれた時、招聘されてアメリカから渡つた野口は、同會で三大講演をやつた、そして全歐の學界に鳴りひゞいてゐる同會會長フオンミユーラーに深大の敬禮を拂はれた。講演終了の後、野口と一言半句でも交はしたいと押寄せてくる崇拜者の

招聘

洪水に對して、水門を加減するのは非常の骨折で又非常の喜びであり誇りであつたと東京帝大の眞鍋嘉一郎教授が當時の思ひ出を書いたのを今に記憶する。當時ウインの最大新聞紙は第一面に野口の肖像をのせ、「日本の凱旋」と最大の活字で題した長記事をのせた。その後ドイツに行つてベルリン郊外ダーレムに、新設のガイゼル"ウイルヘルム研究所の開場式に招待された。式後に當時全歐の覇王であつた萬有科學の權威國ドイツ皇帝陛下から數百人の學者の前で、親しく推稱の演說を忝うした唯一の光榮者は彼野口であつた。

かゝる學者が日本人であつたといふ事はどれほど日

覇王萬有科學忝うした

本の光榮であるか、後進の青年輩にとりて何等の活ける教訓であるか。惜しいかな、その日〳〵の紛々たる出來事が絶えず眼前に現るゝので健忘の我々は、かゝる偉人の存在をもさつさと葬り去つてしまふ、無理も無いが殘念である、教育上からも多大の損失である。

野口は福島縣の猪苗代湖畔の極貧兒と生れ、三歳の折爐に落ちて左手は無殘に燒けたゞれた不具兒となつたが、天分の英才は小學時代から光りだした。これを認めてこの神童を大成せしむべく努力した最初の恩人は、猪苗代町古城町に現住の小林榮さんである。その小林翁に招かれて野口の生家を訪うたのは九月二十四日の旗

九月二十四日
昭和五年。

日であつた。

野口英世の生家と猪苗代湖

驛につくと小林翁が同志數人と共に迎へてくれる、乘車して五分ばかりすると古城(名の通り城跡のある所)の翁の家に着き、在アメリカの野口未亡人メリーさんから送り屆けられた一切の記念品を見せて頂いた。「世界人の横顔」にある自畫像原物がある、同じく野口の描いたメリー夫人の像がある、又いろ〳〵のスケッチがあ

る。エクアドル國から贈られた軍醫監の禮服と通常軍服、軍劍・軍帽がある、日常身につけた幾通りかの衣服・シャツ等がある。歐米諸國から寄贈の學位記・表德記・推戴記等は無數にある。これ等は他日野口記念館を建てて永久に保存して世界觀光團の巡禮所の一としたいと思ふ。美しい猪苗代湖は「野口英世その湖畔に生る」で世界に知らるゝ時が來ないとは限らぬ。

記念品の數々を感激の眼で眺めた後、湖畔に沿ふ長い田舍路を乘車十分ばかりで三城潟(じやうがた)に着いた。豫想通りの一寒村——そのうちにも念入の破屋の前に「野口英世誕生の家」と木標がある。湖水に面した中庭には海軍少

將松平子爵の筆で同文の石標がある。その下に遺髪が埋められてゐる。

高松宮殿下恩賜の植樹が列を正してゐる。隣の隣が松島屋といふ伯樂宿である、これも可なりすたれたが偉人の少年時代の尊い記念である。同家の老女が親切に案内してくれた「こゝの柱によりかゝつて野口さんは夜更けるまで本を讀んで居ました」。ぼろにくるまつた不具の少年――家には燈火が無いので、この伯樂宿のふろ番をしながらその光で勉強したのであつた。

それが小學卒業後ほとんど獨力で醫學を修め、出京してほんの一時濟生學舍に學び――卒業後順天堂の助手――高山齒科醫學院講師――傳染病研究所助手――内務省檢疫係――支那牛莊の衞生局附屬醫院の研究部長――渡米してペンシルバニヤ大學病理學の助手――ワシントン市のカーネギー研究所助手――ロックフェラー醫學研究所助手(一九〇四年)といふ徑路を踏み、それより以後は加速度的に躍進向上進歩して、一九一四年には世界の權威を集めたロックフェラー研究所最高幹部の「メンバー」(六巨頭)の一となり、最後までこの光榮の位置を占めて學界無上の偉勳を立てた。ほとんど奇蹟といつて差支はなからう。

加速度的

さるにても湖畔に立つて見渡す所何といふ破屋！

しかもコントラストに何といふ湖水の風致！　いろいろの思ひで知らず識らず垂れた頭をふりあぐると、磐梯山の雄姿！　たそがれ近い、雲は去り雲は來つて峻嶺をあるひは現し、あるひは隱す。この山水秀麗の氣をうけて向後、百年あるひは千年再びかゝる偉人が生るゝか、どうか、一切は神祕の幕のかげである。

（東京朝日新聞）

次の文より動詞・助動詞を選べ

イ、世界人とは世界一般に廣く知られてゐる偉人といふ意味であらう（八一頁）

ロ、優勝者の名譽を表彰する方法は、極めて精神的で、神前に植ゑてあるオリーブの葉で作つた冠が授けられるに過ぎなかつた（五四頁）

丘淺次郎　理學博士。動物學者。靜岡縣の人。明治元年生。

生活は戰爭なり　第十七世紀のイギリスの哲學者ホッブスの言。

一六　競爭と科學

丘淺次郎

この頃は世界の平和といふことが頻りに唱へられる。世界大戰の慘害を目のあたりに見た者が、戰爭などの全く無い平和の世の中を夢みて、これに憧れるのは決して無理ではない。併し、今日までの歷史に鑑み、又現在の狀態を觀察すれば、絕對的平和の時代が人類生活に來ようとは思はれない。「生活は戰爭なり。」と昔の人の說いた通り、凡そ生きて居る以上は、何等かの形に於ける戰は避けられない。さうして多くの異つた民族と民族とが對立して、各自の發展に努めてゐるからは、その間に利害の

濟まず。

怠らない。

衝突の起る事の免れ得ないのも明白である。

甲の膨脹が乙の存在を危くするとか、丙の發展が丁の進路を塞ぐとかいふ場合には、到底そのまゝでは濟まず、談判に談判を重ねても遂に纏らなければ、何と言つても戰爭の外に方法はなくなる。されば、何れの民族でも、一方には熱心に平和を唱道し、力を盡して戰爭を避ける手段を講じながら、他の一方に於ては、萬一の場合を慮つて、軍備を充實することを決して怠らない。假令戰ふには至らないまでも、他の民族からの無理な要求を拒絶するには、常に相當の軍備のあることが必要であることは當然である。

開けなかつた

今の世の中で戰爭を始めるには、非常な決心を要するから、容易な事では砲火を交へるまでには至らないだらうが、その間にも、民族の競爭は決して休んでは居ない。平和の時代には、又所謂平和の戰爭が盛んであつて、これに敗れた民族は、實に悲慘な狀態に陷らなければならない。平和の戰爭とは、卽ち世界の市場を相手とする殖產工業の競爭であつて、この競爭に於ては、優良品を安く賣出す者が勝利を占めるのは無論である。交通の開けなかつた昔の時代には、各民族は自分の入用な物を自分で造つて、他とは交渉なしに生活することが出來たが、文明が進み、運輸が便利になつて、世界の隅々までが隣同士の

如くになつた今日に於ては、鎖國は到底不可能である。他民族と貿易する以上は、否でも應でも平和の戰爭に加はらなければならない。かくして、實戰の有無に拘らず、民族間に競爭の絶える事はないが、この競爭に勝つか負けるかは、主として科學の進步如何によつて決するのである。

最近の世界大戰の如きは、既に殆ど科學の戰爭とも言ふべきであつたが、今後の戰爭では、更に科學の應用が盛んになつて、その勝敗は科學應用の最後の僅少な優劣によつて決することであらうと思はれる。終局の勝敗が種々複雜な理由によつて決するのは無論で、一概には論

斷せられないが、他の事情が大體同樣である場合には、一歩でも先へ科學の進步して居る方が必ず勝つべきことは疑ひがない。飛行機でも、潛水艦でも、毒瓦斯でも、爆彈でも、敵に優つたものがあれば、無論それだけ勝てる見込が多い。而も、優良な武器を造ることは、決して一朝一夕に出來る譯ではなく、常々から十分に研究を積まなければならず、そのためには、基礎となるべき科學の進步が何よりも必要である。科學研究に遲れた民族は、何時でも他の新發見や新發明を僅に眞似するに過ぎないから、何時までも他より先に進むことが出來ず、永久に他の後に隨つて行く外はないが、これでは、一朝事あるに臨んで、頗

腕前がなければ

る心細い次第である。

假に最新式の武器を外國から輸入したとしても、これが破損した場合には、これと同等か又は同等以上のものを製造し得るだけの腕前がなければ、完全な修理は出來ない。又最新の科學的知識を應用した機械は、當然精巧を極めたものであるから、これを操縱するには、それに準じた高い程度の科學的素養と科學的腦力とを要する。若しもこの點に缺けた者が操縱すれば、飛行機ならば墜落し、潛水艦ならば沈沒するのが當然である。されば、今後萬一の場合を思へば、專門科學者の研究が極めて大切であることは勿論であるが、同時に、一般世人の科學的素

養の水準を高めることが何より急務である。

武器を用ひる戰爭は如何に激しくても一時的であるが、所謂平和の戰爭は長く續いて、而も休む時がない。野蠻時代には、交通の便が開けなかつたため、各民族は自國で出來た食物を食ひ自國で出來た衣服を着て濟ませてゐたが、文明が進み、國際間の關係が密接になるに隨つて、嗜好も次第に變り、新たな要求も生じて、他國の產物を輸入せずには一日も暮されないやうになつた。例へば、茶の出來ない國でも、茶が日常缺くべからざる飲料となり、羊の飼へない國でも、誰も彼もが毛絲製の物を着るやうになつてゐるが、輸入を要するのは必ずしも斯樣な簡單

輸入しなければ

な物ばかりではない。文明が進めば、人間の生活が複雜になつて、日々に入用な品物も、多くは精巧な細工を施した人造品である。用談には電話機を用ひ、外出には自動車に乘り、手紙はタイプライターで書き、着物はミシンで縫ふといふやうに、何をするにも機械が入用であるが、此等の機械を製造し得ない民族は、悉く此等を他から輸入しなければならない。單に娯樂のためにも、ピアノ・蓄音機・活動寫眞機・ラヂオなどを要する。

かくの如く、文明人の生活には、機械は附き物であり、必需品であるから、誰もこれを使はずに濟ます譯には行かない。文明の進むにつれ、その需要は益〻殖える一方であ

外はない。

る。しかも、精巧な機械を造るには、考案者のみならず、實際に手を下してこれを製造する職工までが、科學的知識を備へて居なければならない。若しも職工の頭が低級であれば、形だけは巧妙に眞似ても、用ひて見ると、全く役に立たないやうな、似て非なる物を造るであらう。されば、世間一般の科學的素養の低い國では、天産物をそのままで安く輸出して、加工品を外國から高く輸入しなければならず、それでは經濟が成り立たない。特に面積が狹く天産物に乏しい國では、斯樣な狀態が長く續いては、やがて破産する外はないのである。輸出と輸入との平均を保つて行くには、是非とも他國に劣らない立派な品物

水準

を製造して、世界の市場に持出さなければならないが、それには、一人々々の職工までが相當に優れた科學的知識を持つまでに、一般の水準を高める必要がある。

科學の進んだ民族は、製造の方法を巧に工夫して、優良品を安く賣出すことが出來る。これに反して、科學の幼稚な民族は、腕が足りない上に、製造に無駄な手間が多いので、拙劣な品を高く賣らなければ引合はないので、同時に市場に現れた場合に、何れが競爭に勝つかは、態こゝに論ずるまでもない。

以上は、單に物質方面に於ける科學の必要に就いて、些かその所感を述べたのであるが、併し、決して科學の效用

等閑視

はこの方面に限る譯ではない。科學的に考へ得る頭腦を有することは、思想方面にも頗る有效であつて、他の民族に負けないためには、この方面を特に大いに奬勵しなければならない。武器やその他の製造工業の方に直接應用されるのは、主として物理學と化學とであるから、動もするとこれのみが必要なものの如くに考へられ易いが、如何に巧妙に出來た人造品でも、無論天產物に加工したものに外ならないのであるから、その材料を研究するためには、動物・植物・鑛物などの學問をも等閑視してはならない。併し、此等は思想の上には餘り直接な影響は及ぼさない。思想の上に殊に大關係を有するのは生物學

頑冥

である。

今日の社會制度は昔からの引續きで、隨分不合理と考へられる部分もあり、强ひて維持しようと努めると、却つて破滅を早める心配がないとも限らないから、時期を見計らつて徐に改めて行かなければならない點が少くない。生物學的知識が國民一般に行渡つて、思想の根柢を作るやうになれば、頑冥な舊思想に何處までも從ふことは不可能となり、不合理な制度も段々に改良されるに至るであらう。

右に述べた通り、物質的にも、精神的にも、民族發展のためには、科學の進歩が何よりも大切であるが、この事は如

何なる民族でも同じ程度になされ得べきや否やと尋ねると、これは無造作に「然り」とは答へられない。猿には、如何に骨折つて仕込んでも、猿だけの藝しか出來ないが如く、各民族にはそれ〴〵科學的能力の限度に差異があつて、盛んに科學の進歩する民族もあれば、幾ら奬勵しても或程度以上には到底進み得ないのもあらう。例へば、黑人が俄に進歩して、科學の研究に於て白人を凌ぐやうにならうとは到底考へられない。自己の屬する民族の將來を思へば、科學は何處までも奬勵して、その進歩を圖らなければならず、又研究すれば研究しただけの效果は必ず擧るに相違ないけれども、その民族としての天分以上

出來まい。

忽諸

のことは遂に出來まい。

科學が進まなければ、他の民族に負けることは明白であるから、苟も發展・繁榮を望む民族は、科學は能ふかぎり進めなければならない。けれども、或民族は全力を盡しても、この點で他の民族に到底肩を比べ得ないといふこともあらう。斯樣な場合には、民族そのものを改良するといふことも亦考ふべきであらう。

ともあれ、人の世に競爭の存續する限り、苟もその競爭場裏に立つものは、人事を盡して天命を待つ外はないのであつて、吾人は茲に科學研究の一日も忽諸に付すべからざることを痛感するのである。（猿の群から共和國までに據る）

田山花袋　名は錄彌。小說家。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。

照りたるぞよき

華胥に遊ぶ

一七　夏の風趣

山花袋

七月初旬の曇天は、續いて月の末に至ることあり。また中旬より晴れて、赫々たる炎威を恣にする事あり、茲に至りて人は始めて夏の暑さを感ず。

夏は曇りたるより照りたるぞよき。碧空に日の光きらゝかに輝きて金をもとかさん日、靜に机に向ひて書を讀むも興なきにあらず。黃塵の堆き裡におのが業にいそしむも、またおのづから樂しみあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつゝ、靜に華胥に遊ぶ暇あらば、いかに嬉しからん。

團欒

寒山竹

ゆくりなし

日の暮るゝを待ちて檐の岐阜提燈に火を點じ、緣に花ござ敷きて、團扇搖がしつゝ一家團欒の物語に耽る、眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし。空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指さし合はん。月あらば更によし。梧桐・寒山竹の間より、研ぎ澄したる鏡の如き光を仰がんには、晝の暑さも忘れ果つべし。

幼き頃田舍にゐて、垣根の杉などを手折り來て、古すり鉢に灰少し入れて、蚊燻したる事を想ひ起す。蚊遣火は趣深きものなり。其所とも知らぬ森の中に、ゆくりなく立昇る蚊遣の煙此所にも人住めりやと懷し。

夏の旅殊にをかし。日盛りの二三時間を、松並木の涼

しき休茶屋に寢て過し、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の日よりも却つて長き里程を歩み得べし。田舍路の休茶屋などに、清き水涌き出でてさうめんを冷したる、食指おのづから動く。

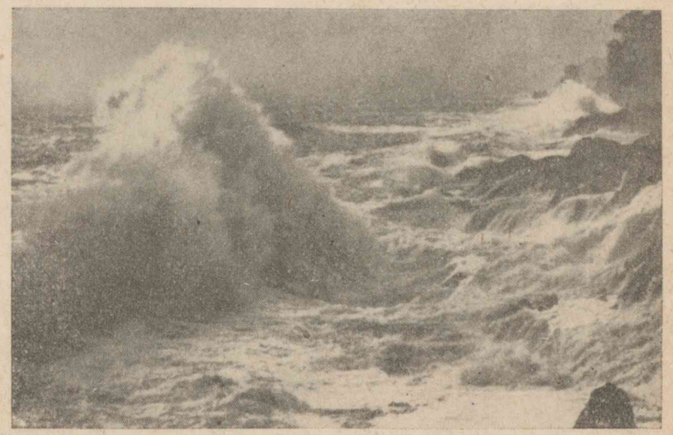
さうめん（素麺）食指動く

登山

登山も夏の面白きものの一つなり。輕裝して都を出で、遙に連山の蒼翠を望む、心既に白雲の上にあり。登山の快は絶巔に登り得たる時にあり。これ言ふを俟たず。されど絶巔に至るの努力も、また一快なり。喘ぎ〳〵登るに、森林盡き、草

喘ぐ

富士山 海拔三七七八米。
御嶽 海拔三〇六三米。
駒ヶ嶽 海拔二九五六米。
白馬嶽 海拔二九三三米。
槍ヶ嶽 海拔三一八〇米。
立山 海拔三〇一〇米。



怒濤

原盡き、高山植物盡き、遂に岩石磊々たる所に達す。一望誠に天下を小とするの思ひあるべし。登るべき山は富士山を始め、木曾の御嶽・駒ヶ嶽、更に日本アルプスの雄峯たる信濃の白馬嶽・槍ヶ嶽、並びに越中の立山などなほ到る所多し。

海もよし。山もよし。山ならば老樹深く、溪流清く、嵐氣肌を襲ふ所、殊によし。海ならば絶海の邊、怒濤天を衝く邊に行くを要す。世の常の海水浴場など、徒らに暑さを增すの料たらんのみ。

七月中旬乃至下旬より晴れたる空は、年によりて多少の相違はあれど、十五日乃至二十日間續くべし。この照によりて、稻もその株を分蘖せしむ。この照、この暑さの稍〻緩む時、卽ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨頻りなり。

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空現れ、日の光射すかと思へば、白き黑き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として到る。物干竿の衣を取入るゝ暇もなし。その雨量比較的に多く、所によりては河水氾濫し、鐵道不通になる

分蘖（ブンゲツ）
沛然
氾濫

歐陽修
宋の廬陵の人。八大家の一人。熙寧五年(西紀一〇七二)歿、年六十六。

秋聲賦
初めに、天地萬物の春から夏、夏から秋と變つてゆくさまの窮らぬことを述べ、終りに、人生の憂感も之と同じく變るものであると述べてある。

事も往々にしてあり。

この雨晴れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間・叢裡、既に秋の聲あり。梧桐・芭蕉は殊にこの聲を聞くに住し。歐陽修が秋聲賦の思ひ出さるゝはこの頃なり。

雲の色と態と稍趣を變ふ。奇峯漸く少く、白き雲多し。夜、稻妻の遠く光るもこの頃なり。一閃毎に闇の中の雲の姿を明らかに辨じ得たる、言ひ知らず面白し。田の面には涼しき風吹き渡る。

(花袋小品)

石井滿
社會評論家。千葉縣の人。明治十九年生。

馬入
神奈川縣に在る川の名。

富士・安倍・興津・大井
何れも靜岡縣に在る川の名。

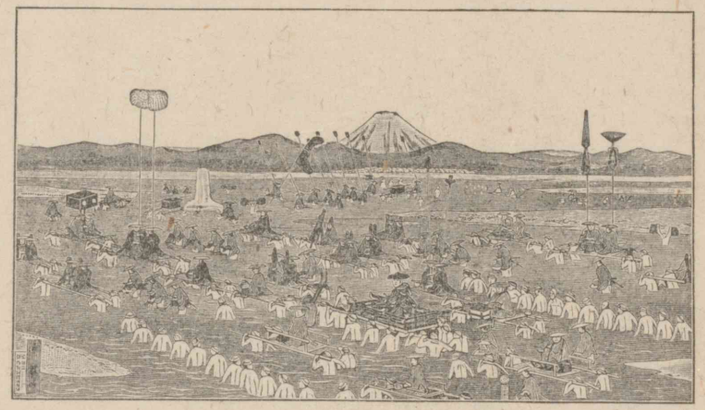
一八 旅の今昔

石井滿

遠い昔は姑く措いて德川時代の交通は、非常に面倒なことになつてゐた。それは、第一には、戰爭の都合からでもあつたらうが、各街道に關所を設け、旅人がそこを通過するには必ず切手を必要とし、忍んで關所を通過するものは重追放に處し、脇道を越したものは、直ちに磔刑に處した。

また東海道の諸川中、馬入・富士・安倍・興津・大井などの川々には、故らに橋を架せず、舟を置かず、旅客は川越の人夫の肩か、輦臺に乘つて渡る外はなかつた。一度大雨が降つて川水が增すと、忽ち行旅は停滯し、その混雜と迷

芝居の勸進帳
源義經が兄頼朝の疑ひをうけ、山伏姿に身をやつし奥州へ落ちのびて行かうとして加賀國（石川縣）安宅の關にさしかゝると、取調に逢ひ通過がむづかしくなつた時、家來の辨慶が勸進帳をよみあげて漸く許されて通るといふ筋の芝居。



徳川時代の大井川

惑とは名狀し難いものがあつた。

箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川

といふ俗謠がよく當時の狀態を說明してゐる。

その箱根の關所でさへも、亦なか〳〵厄介なものであつた。關所の面倒なことは、古い芝居の「勸進帳」にもある位で、頗る詮議がむづかしかつたのである。

延喜式
朝廷年中の儀式。百官臨時の作法、諸官中の事務等を詳らかに記したもの。延長五年（一九七）藤原忠平等勅を奉じて編成したもの。

能因
俗姓は橘永愷（ながやす）。歌僧。白河天皇（第七十二代）頃の人。

それで、この關所を通る切手は實に大切にされた。

昔の旅が如何に困難であつたかといふことは、「可愛い兒には旅をさせよ。」とか、「旅は道づれ、世は情。」とかいふ言葉でも分る。

延喜式といふ本によれば、相模國から京都まで、上り二十五日、下り十三日、武藏國から京都まで、上り二十九日、下り十五日とある。當時の標準速力は、馬が一日凡そ十一里、歩行は八里餘であつた。かの能因の、

都をば霞とともに立ちしかど
秋風ぞ吹く白河の關

といふ歌にもある通り、春霞都門を出で、秋風白河に入る

芭蕉　姓は松尾、名は宗房。俳人。伊賀國（三重縣）の人。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

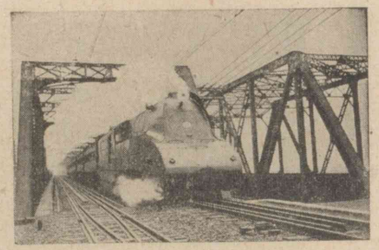
奥の細道　一卷。芭蕉の奥州紀行文。

一九（十返舍一九）　本名は重田貞一。小説家。天保二年（一八三一）歿、年五十七。

といつたやうなわけで、當時の人には日本六十餘州はかなり廣大な土地のやうに思はれたことであらう。況や親の敵討などで、あてどもなく唯一人の仇の行方をぶらぶらと搜し廻るのは、全く氣の長いことであつた。それだから、芭蕉の「奥の細道」のやうな文章も、また一九の「東海道膝栗毛」のやうな文學も、旅から得られたわけである。

驛傳

昔の街道といへば、松並木が連つて、掛茶屋がちらほらしてゐた。そこを長槍・大駕、大名の行列が通る。馬の鈴を鳴らして、驛傳のものが行く。伊勢參宮や京上りの商人が往來する。まるで繪卷物に見るやうな悠長千萬なものがあつた。



超特急列車

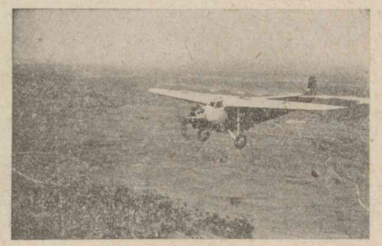
それが、今ではどうであらう。京都から更に約四十三粁の彼方なる大阪へと、東京驛頭を發する汽車には、快走僅に八時間餘りで到り得る超特急列車があり、車内の設備や乘客の待遇などについて、眞に移動ホテルの觀がある。蓋し、現今に於て最も快適にして安全な東海道の旅は、これを推して第一とすべきであらう。

しかしいはゆるスピード時代にふさはしいものは、何

障碍　俯瞰

鈴鹿　三重・滋賀兩縣の境を南北に走る山脈の名。

よりも飛行機でなければならない。彼の旅客機は氣象の上に障碍を見ない限りは、毎日定時にこゝらの空を飛んで、昔の海道筋を俯瞰しながら、箱根山・大井川の險難を物ともせず、木曾の長江に一縷の銀線を喜び、鈴鹿の白雲に高く翔れば東京・大阪間は凡そ二時間餘を費すに過ぎない。



旅客機

若し道路が到る處に完全になれば、自動車の旅も、昔の五十三次を二日で走り得て、現代的慰樂を人に賦與するに十分であらう。それにしても、移つて來た世情ではないか。

（「鐵道讀本」に據る）

鈴木文史朗　名は文四郎。東京朝日新聞記者。千葉縣の人。明治二十三年生。

七つ　今の午前四時。

機　コメット旅客用飛行機。

筑波　茨城縣に在る山。海拔八七六米。

秩父　埼玉縣の西部秩父盆地の奥周緣に聳える諸山の總稱。

新宿　東京市四谷區新宿。

オランダ　和蘭。ヨーロッパ西部の小國。

後樂園　東京市小石川區小石川町に在る名苑。江戸時代に水戸德川家の經營したもの。

一九　空の旅

鈴木文史朗

「お江戸日本橋七つ立ち…」――空の膝栗毛も日本橋から立つことにしようぢやないかと、機は中央線に沿つて進む。「武藏野の廣さに今更感服するね。まるで野の海だ。」「なあに、武藏野ぢやない、關東平野だよ。」――道理で筑波や秩父の連山が白雲のハンケチを振つてゐる。

新宿あたりへ來る迄、東京の郊外に赤瓦の屋根の多いのにあきれる。まるでオランダあたりの田舍の景色だ。

小石川區内の後樂園の名苑も、上からは一つまみの草叢、國技館が坊やのシャッポ。

國技館
本所區回向院に在る角力の常設館。

震災
大正十二年九月一日。

日本橋附近

東京驛から丸の内一帶は、煉瓦石をならべたやう。ところどころ大きなビルディングが思ひ出した様に突つ立つてゐるばかりで、總じて空から見た東京は、まだ震災後六年目が、五六日目と思はれる程のバラックの海に見える。

寫眞の手前の橋が日本橋、左の大きな建物が三越とその附近。銀座々々と大騒ぎする東京のブロードウェーも、千五六百メートルの上から見ると、眞田紐か何ぞを伸ばしたやうで榮えない。人の影はなく、電車の走るのが高麗鼠(こまねずみ)ののたくるやうだ。お江戸の日本橋も、しやれでなく二本箸である。

おなじみのお臺場はまるで鯨の一群だ。品川の海に

ブロードウェー
米國ニューヨーク市の最中心大通。

高麗鼠
「まひねずみ」といふ。頭胴七糎。純白・黑・褐等數種ある。

お臺場
品川灣に在る舊砲臺。嘉永六年(一八五三)に築造。

銀座通

鐵道唱歌　大和田建樹の作「汽笛一聲新橋を…窓より近く品川の、臺場も見えて波白き、海のあなたに薄霞む、山は上總か房州か…」

品川　東京市の一區。舊品川町は五十三次の第一宿。

お臺場がなかつたら、紀州沖に鯨のゐないより寂しいだらう。　お臺場は黑船退治の役に立たなくても、品海の盆石になり、火藥庫となり、鐵道唱歌に名を留め、今は飛行の標識となる。　無用の有用、有用の無用の堂々廻り。　お臺場に次ぐ空からの觀ものは品川一帶の埋立地。　よくかうも埋め立てたと思ふほど整然と埋め立ててゐる。　人間の地面慾は恐しい。

「昔の江戸つ子は、上方道中に品川宿で早晝をやつたものださうだよ。」「僕等は日本橋からまだ五分と飛んでゐないぜ。」「おや、今日の晝飯はどこかね。」「お伊勢樣の海の上さね。」…

京濱國道　東京・横濱間をつなぐ國道。

大森　東京市大森區大森。

羽田　東京市蒲田區羽田。

彌次郎兵衞・北八　十返舍一九の著、東海道中膝栗毛に出てゐる人物。

商賣往來　商用の文字を書き集めた書。

十二時前に大阪着の豫定だ。

品川へ來て忘れたる物ばかり――江戸町人は品川宿を引返しのつかぬ道中の一部分にかぞへてゐたものだが…。

機は京濱國道の眞上をつぼくろのやうに一文字に飛んでゆく。　大森・羽田の海岸は、今を書き入れの海水浴場が、例により鳴物入で、旗・差物押立ててやつてゐるのが手に取るやうに見える。　海岸はあいにく青い水と來ないから、ボール紙へ胡麻鹽をふりまいたやうに、大勢の者が水遊びをしてゐる。　彌次郎兵衞・北八がこの飛行機にゐようものなら、「こう、海を錢湯とは商賣往來にもあるめえ。」

安房・上總　千葉縣。
三浦半島　神奈川縣。
大磯　神奈川縣中郡大磯町。

「ねえことか。人間を海に大もり泳がせて…」とか何とかやりさうな人出。

港の雜音で騷がしいあの横濱の港も、機上から見ると晝休の田圃のやうにひつそりしてゐる。——實はプロペラーの音で聞えないのだ。數へて見ると、二本マスト以上の汽船が二十七隻、これだけで可なり港はつまつて見える。五十隻の船はとても横濱へははいれない。これではいかん。——空を飛ぶと、どうも氣が大きくなる。

こゝで安房・上總の山々を左に、三浦半島の根元を一またぎに大磯の上へ出る。五百メートルの低空に舞ひ下つて敬意を表する。漁師の暑中休暇でもあるまいに、寄

三崎　神奈川縣三浦郡三崎町。
川奈崎　靜岡縣田方郡伊東町の東南端。
辻堂　神奈川縣高座郡藤澤町の内。
茅ヶ崎　同茅ヶ崎町。
二宮　同中郡吾妻村二宮。
江の島　神奈川縣鎌倉郡川口村片瀬の海上に浮ぶ小島。

席の土間にぎつしり下駄をならべたやうに、小舟が濱にあがつてゐる。大磯の上から弓なりに彎入した相模灣の岸傳ひに飛んでゆく。振返つて見ると、三浦半島の三崎邊が引きしぼつた弓弦の下のつけ根。他の一端は伊豆半島の川奈崎か。この滿月形の弓に沿つて、辻堂・茅ヶ崎・二宮などの町々の屋根が、庭の小池のふちに咲いた松葉牡丹のやうに可愛い。江の島が海綿のやうに浮いてゐる。相模川を眞中に兩岸の平野が賴もしく廣い。なぜ賴もしいつて？　いざとなつたらあの邊へ着陸…といふ見當がすぐつくもの——弱音のやうだが、正直なところ、これが素人乘客の實感だ。

木下飛行士
木下耶摩次。

こゝから機首は右に向ひ、愈〻箱根の山に差懸る。箱根山は飛行機にも、天下氣流の險…突然、正面の操縦室のドアを木下飛行士が内からこつ〳〵叩く。あけると、彼の大きな手だけがによつきり出て紙片を渡した。四人が鼻を並べて見ると、「山の氣流が烈しさうだぞ。搖れても驚くな。」――おい〳〵、驚かすなよ。四人は思はず兩手で籐椅子の肱掛を握る。

（空の旅地の旅）

次の文より副詞・動詞を選べ

イ、昔の人には日本六十餘州はかなり廣大な土地のやうに思はれたことであらう（一一四頁）

ロ、突然正面の操縦室のドアを木下飛行士が内からこつ〳〵叩く（一二四頁）

鹽井川
靜岡縣（遠江國）の東部、菊川の附近、

二〇　膝栗毛

十返舍一九

鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾まくり上げてこゝを渡るに、彌次郎・北八も、いざや引連れ渡りなむとする折柄、京のぼりの座頭二人連、此の川の歩渡（かちわたり）なるを聞きけるにや、一人の座頭、犬市「もし、川は膝ぎりもござりますかな。」北八「さやう〳〵、しかし水が早いからおめい方あ、あぶない。用心して渡んなせえ。」犬市「はて、成程水の音がよつぽど早い。」といひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げ込んで考へ、犬市「いや、こゝらがどうか淺いやうだ。こり

さん・なあ・むめ・りやん・ごうさい〳〵
この語は、拳を打つ呼聲。さん(三)なあ(感)むめ(五)りやん(二)ごう(五)さい(感)。

や猿市、二人ながら脚絆をとるも面倒だ。お主若役におれをおぶつて渡れ。」猿市「はゝ、はずるい事をぬかす。拳でまゐらう。何でも負けた者がおぶつて渡るのだ、よしか。」犬市「こりや面白い。さあこい、さんなあむめで。」猿市「りやん、ごうさい〳〵。」と片手拳をうちながら、兩方から左の手を出した。互に拳をうつ手を握り合ひ、犬市「さあ勝つたぞ勝つたぞ。」猿市「えゝいま

いましい。なんならこの風呂敷包を貴様一所にしよはつせえ。それよしか。さあ來い〳〵。」と支度して背中を向ける。彌次郎、これは有難いと、猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつさと川へはいり、難なく向うへ渡ると、こなたの岸に殘りたる犬市、「やい猿よ、どうする。早く川を渡さぬか。」猿市向うの岸にて聞きつけ、腹を立て、「こりやじよだんな奴だ。たつた今おぶつて渡したに、又そつちへ行つて俺をなぶるな。」犬市「馬鹿いへ。おのればかり渡つて太い奴だ。」猿市「いや太いとはそつちのことだ。」犬市「こりやおのれ、兄弟子に向つて、言語道斷な。早く來て渡さぬか。」と、白い眼をむき出し腹立つる故、猿市仕

方なく、又こちらへ渡りて歸り、「さあ、そんならおぶさりなさろ。」と、背中を出す。北八しめたと手をかけておぶされば、猿市またさつさと川へはいる。犬市は大きにせきこみ、これ、「猿市どこにゐる。」猿市川の中にて、「いや、こいつは誰だ。」と、北八を川の中へどんぶりおとす。北八「やあい、助けてくれ、助けてくれ。」と、手足をもがき流るゝゆゑ、彌次郎飛び込み引上ぐれば、頭から骨までくさるほど濡れ、北八「えゝ、座頭めが、とんだ目にあはしあがつた。」彌次「はゝはゝゝゝ、まづ着物を脱ぎやれ、しぼつてやらう。」北八「全體彌次さんがわるい。何のおぶさらずともいゝことに、お前が手本を出したから、つい俺も、」彌次「川へはまつたか。

氣の毒な。はゝゝゝゝ。それで一句やらかした。

はまりけり眼のなき人と侮りし
むくいは早き川のながれに」

北八「えゝ聞きたくもねえ、よしてくんな、あゝ寒い〳〵。」と裸になり、がた〳〵ふるへ乍ら着物をしぼる。此のうち座頭は川を渡り行き過ぎる。彌次「こゝで干してもゐられめえから、着替を出して着やれ。どこぞで火を焚いて貰つて、あぶるがいゝ。」北八「えゝいま〳〵しい。風をひいた。ハアックシヤミ。」とぶつ〳〵小言をいひ乍ら着替を出して着かへ、くさつた着物は、縛つて引きさげ出かけると程なく掛川の宿に至る。

（東海道中膝栗毛）

島崎藤村
一頁頭註參照。

三　初學者のために

島崎藤村

一

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、やうやく岸を離れることができるやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通うたうちに、向うの河岸まで泳ぎこすことができた。更にまた一夏泳いでみたら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃にはよく解らなかつた水瀨の速い遲いも解つてきたし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たい溫かいも解つてきたし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることもできた。板子無しには溺れるほかは無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。普通の泳ぎ手がゆけるところまでは自分も到り得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身のできる人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

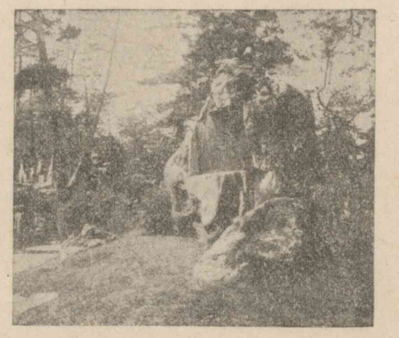
文章の道にも、たれにでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまでゆ

小諸　信越線の一驛。長野縣小諸町。

くことは決して難く無いに相違ない。

二

信州の小諸（こもろ）に居た頃、私は弓を稽古したことがある。だれでも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んでいく。射手の心にも賴むところもなく、矢の曲直を辨別



小諸藤村詩碑

慢—漫—鰻

いくやう。

する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私たちの矢場へ來た。その老人が、先づ姿勢を正すことを私たちに教へてくれた。それからの私たちの矢は、たとひ的を貫くことができないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所をいくやうになつた。

これは文章の道にも當篏めてみることができる。ただ好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばな

らない。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついでいつて土を耕してみた。私は、先づ荒れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や、じやがいもの芽のやうな植ゑ易いものから作つてみた。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑてみた。草を取りにゆき、肥料をかけにいつた。じや

肅—蕭

がいもの花が白くさかりな頃にいつて、試に土の中を探つてみると、はや圓いのが幾つも〳〵根もとの方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、生つた嫩い實を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、ほんたうの農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことができる。

われ〳〵が、文章の手本とすべきものが、何程われ〳〵の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初である。

四

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕ぎ廻つたことがある。最初のうちは、むやみに手足を動かし、あの長さ一丈ほどもある櫓を、前へ押し手許に引きして骨折つてみた。それ

淺草橋　隅田川にそゝぐ神田川の下流に架した橋。

兩國橋　隅田川に架した、日本橋區から本所區へ通じる橋。

でも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことができるやうになつた。向うから大きな傳馬がやつてきたぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いでゆく樂しみなども、それから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには、「力の省略」がある、「簡素の美」がある。

文章の道にも、むやみに筆を弄することが、決して自己の眞の表白とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶の力」がある。

できるやうに

（飯倉だより）

大谷繞石　名は正信。英文學者。俳人。島根縣の人。昭和八年歿、年五十九。

仰いで

三　趣味の日記

大谷繞石

八月十日

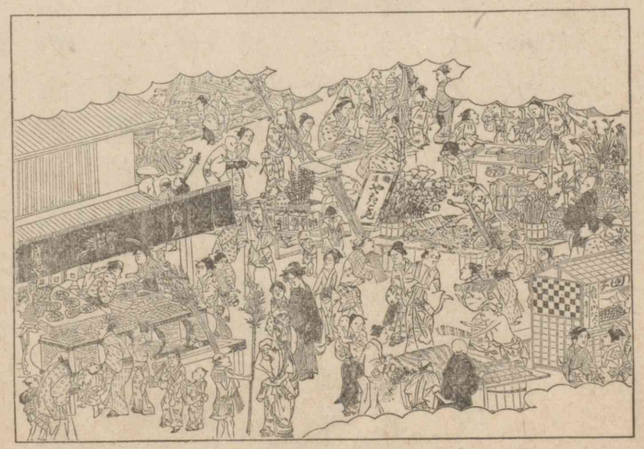
夕暮近く南の空に雨雲が湧く。ぴかりと光る。程經て遠くでごうと雷が鳴る。雲は北へ〳〵と廣がる。南は墨を流したやうに黑くなる。眞上の空は雲の絶間にまだ青空が見える。「一雨來ればいゝが。」と風呂から出た父が緣で空を仰いでゐる。自分が風呂から出た時分に、果してぱら〳〵と降つて來た。風の伴はぬ强からぬ雨だ。それでも軒の樋を溢れがちだ。廊下の壁外に茂る葉蘭と秋海棠とがそのしづくにひた濡れて、葉を搖がせる。庭の梅の老樹・蜜柑・椿・松・木蓮など、障子をはづしてゐる母家と裏座敷と兩方からの電燈の光を受けて葉をきらめかす。涼しさうでもあり、實際涼しくもある。それも小半時。黑雲は通り過ぎて、雨は收つた。そして上層の白雲も次第にちぎれ〳〵て、家族四人が、緣側へ持出した食膳にそろつた時には、空は全く澄みわたつて、あたかも十五夜の月が洗はれたやうに清く隣家の瓦屋根から二尺も高くのぼつてゐるのであつた。

涼しさう

葉蘭葉かげの墓もあざやか庭の月

八月十二日

街の大通をつなぐ四つの橋の兩袂で盆前二日の間、朝早く草市が立つ。今朝薄明に起きて、一番近い橋へ行つた。はや通りもならぬ人ごみだ。手拭で髪を包んだ手甲・脚絆かひ〳〵しい田舍の娘や婆さんが、花を山と載せた背負籠を前に、橋の兩側の袂にずらりと列んで、お客を呼んでゐる。「山萩・山萩。」「桔



草市

梗や桔梗。」「眞菰はいりませんか、眞菰は。」「稻穗や稻穗。」「鷄頭買ひませんか、鷄頭。」「蝦夷菊々々々。」新しいの、品のいゝの、値の廉いのをと、買ふ人は右往左往に入り亂れる。溝萩を左手に抱きこんで、丹波ほゝづきを選つてゐるおかみさん、大角豆・粟穗・山椒の實といつたものがはいつてゐさうな風呂敷を子に持たせておいて、自分は人中へ割りこんで、をみなへしの束を選つてゐる商人らしい男、麻殼を値切つてゐる婆さん、樒を肩に人押分けて歸つて行く印半纏の男、それだけ買ひに來たのか蓮の卷葉を三枚大事さうに手にしてゐる娘、花をいためまいと桔梗の花束を高く差上げてゐる奥樣風の女と、いろ〳〵さま〴〵

千日紅

だ。混雜だが、美しい。自分は母からいひつかつた通り、をみなへし二束、鷄頭・桔梗・千日紅一束づつ求めただけ。歸宅してから日が出た。

買ふ花の露手を傳ふ草の市

八月二十七日

昨日夕暮から三四時間降り續いた歸來二度目の雨で、今朝は殊の外秋氣を覺える。例によつて緣側に坐つて、中庭を見ながら朝茶をすゝる。日ははや庭の片隅へさしてゐるが、飛石も、庭一面の荒砂も、雨の濡色がまだ乾かずにゐる。木々の葉もつや〳〵してゐる。歸つた時に

蓑蟲

生え。

は、小指の尖ほどであつた蜜柑が、拇指の頭よりも太くなつてゐる。鉢朝顏もはや末になつて、花のある鉢はたゞ二つ。花は晝顏よりも小さい。それでもその鉢を母は日陰へ移してやつた。庭の一ところ日あたりのいゝ所に、松葉牡丹がちらぼら生えてゐる。それも花が稀になつたなと眺める。築山の梅へ眼を移す。葉が非常に乏しくなつて來た。二三枚かたまつて枯れしぼんでゐるのが多い。變だと梯子を出して掛けて檢べてみると、いづれも蓑蟲なのだ。むしつては、下に受けてゐる母の笊へ落す。梯子にあつても手の屆かぬ高枝についてゐるのを三つ四つ殘して他は取り盡した。笊に二杯あつた

には驚いた。「蟲が鳴いてゐますよ。」と妻がいふ。葉蘭の根もとにでもゐるのであらう、ちゝゝと幽ながら聲たててゐることは、四五日前から自分は知つてゐる。「もうつく〳〵ぼふしが鳴くからの。」と母はいふ。さうだ、みんみん蟬が鳴くやうになつたなと思つたのは、ついこの間のことであつたのに、はや、つく〳〵ぼふしが鳴く。蜻蛉も赤蜻蛉になつた。殘暑とはいひながら、秋が訪れたのだなと思ひながら梯子を片付けて緣側へ歸る。

風呂へ汲む水の高音やけさの秋

（北の國より）

大木惇夫
舊名は篤夫。詩人。廣島縣の人。明治二十八年生。

待ちわびし。

三三　秋興

大木惇夫

一秋のおとづれ
秋ともならば、朝な〳〵に
よき伯父の
白馬にまたがり
颯々とおとづれて來ん、
むさし野の
森のかたより
待ちわびし蹄や鳴らん。

二秋　畫

けやき林の奥のあかるさ。
銀笛吹かば
すみて徹らん。
その音いろ
深く、かなしく、
落葉にかゝる蜘蛛の巣の
かぼそき絲も、
白金いろにふるはさん。

（風・光・木の葉）

落合直文
號は萩の家。國文學者。歌人。宮城縣の人。明治三十六年歿、年四十三。
いみじう。

飯田町
東京市麹町區。

二四　萩の家

落合直文

落合直文

おのが庭に一もとの萩あり。秋ごとにその色いと深く、枝などの繁れるさま、いみじううるはし。朝に起きてそれをながめ、夕に立出でてそれにうち對ひたるこゝち、喩ふべきものなし。おのれ、家の名を萩の家とよべるもこの萩のためのみ。一とせ飯田町に住みけるに、枝いたくおひ繁りて、花もやや綻びそめたり。明日・明後日は咲きのさかりならんといひあへりしに、俄に野分の風吹き立ちて雨さへ降りそ

防ぎぬ。

佐土原町・拂方町　共に東京市牛込區。大門町・掃除町　共に東京市小石川區。掃除町は今八千代町と改む。

はりぬ。おのれは妹を語らひ、共に庭におり立ちてそを防ぎぬ。「竹もてこ。その戸はづせ。」など、うちとよめきたるその聲、今なほ耳にあり。その後、程なく、妹は世になき人となれり。

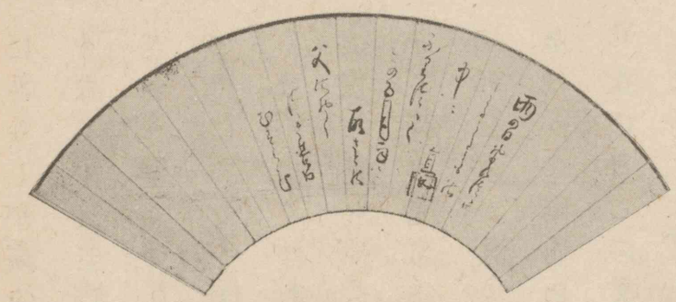
さだめなき旅のならひ、家を移すこと、一とせに二たび三たびは常のことなり。佐土原町・拂方町・大門町など、幾度か移りたり。されどその萩ははなたず。今の掃除町の庭にあるも、やがてその萩なり。その萩は、秋ごとに花咲けり。その花、その色は舊時に變ることなし。唯その萩にうち對ふ己が心は、舊時に比ぶればいたく異り。そは妹のこの世にありしほどは、萩の花は己が心を喜ばし

亡せにし。

雨の日おもひつゝけたるうたともの中に　直文

ふりつゝく
この五月雨に
故さとの
父のおく
つき苔や
むすらむ

高等中學校　今の第一高等學校。



落合直文筆

めしに、妹の亡せにし後は、おのが心を悲しましむるが如し。先の萩と今の萩とかはりあるか。いかでかその萩にかはりあらん。さては、喜ばしといひ悲しといふは、皆わが心からなるべし。

明治二十四年九月三十日、午前九時頃より、空のけしき、たゞならずと思ひしに、雨降り出で、風吹き來りて、その勢おどろ〳〵しく、晝つかたより、いよいよ烈しうなりぬ。おのれ、高等中學校

にありしが、萩のこと、心にかゝらぬにはあらねど、授業ひまなく、午後二時ばかり家に歸りぬ。さて庭を見るに、垣たふれ壁くづれ、例の萩など目もあてられず。あはれ、妹の世にありし頃は、風も防ぎ雨も防ぎてありしに、今日かくはかなくなしたるは、げに口惜しきかぎりなりとて、その夜は寢もやらず。さはいへ、風に吹き折られたりとも、その萩の幾部分は必ずうるはしう咲きもせん。ことしの秋は、咲かずとも、又來ん秋は必ず咲きなん。たゞ悲しきは、かの歸らぬ人のうへにこそ。

次の日、この文を書きてありけるに、例の下枝のあたり朝露こぼれたり。萩も亦心なきにはあらざらん。（落合直文集）

吹き折られたり。

咲きなん。

二五　宿の園生

落合直文

野分して荒れたる宿の園生には惜しきばかりの月のかげかな

佐佐木信綱

天の川さやかにすみて遠蛙なくねしたしき夜ごろとなりぬ

正岡子規

夕顏の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我がいのちかも

落合直文　一四七頁頭註參照。

佐佐木信綱　號は竹柏園。文學博士。歌人。三重縣の人。明治五年生。

正岡子規　名は常規。俳人。歌人。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

伊藤左千夫
名は幸次郎。正岡子規の流れをうけた歌人。千葉縣の人。大正二年歿、年五十。

島木赤彦
本名は久保田俊彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿、年五十一。

齋藤茂吉
醫學博士。詩人。山形縣の人。明治二十五年生。

尾上柴舟
名は八郎。文學博士。歌人。岡山縣の人。明治九年生。

裏戸出でて見る物もなし寒むく〳〵と曇る日傾く枯葦の上に　伊藤左千夫

いくつもの丘と思ひてのぼりしは目の下にして廣き枯原　島木赤彦

ほそぐ〳〵と土に沁みいる蟲がねは月明き夜にたゆることなし　齋藤茂吉

うちよせし波の白泡きゆる音岩間にひゞき日ぞ眞晝なる　尾上柴舟

勝海舟
通稱麟太郎。後、安房と改稱した。海舟はその號。德川幕府の軍艦奉行。江戸城を官軍に引渡すに當つて大功があつた。明治三十二年歿、年七十七。

二六　大西郷の大度

勝海舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて來て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうかかうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出來なければ、何度でも出來る所までやり通す。兎角世間の人は、事業の成就する前にはや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が

毀譽褒貶

出來ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて、知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも、互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出來るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは、到底仕方がない。

勝海舟

そこへいくと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで、一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは、何處へか忘れてしまつたやうだ。その度胸の大きいことには自分もほと〳〵感心した。

官軍が品川まで押寄せて來て、今にも江戸城へ攻め入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷までその談判にやつて來た。當日、自分は羽織袴で馬に跨つて、從者を一人連れたのみで出掛けた。先づ一室へ案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊助といふ忠僕を從へ、平氣な顏で出て來た。「これは遲刻しまして誠に失禮。」と、挨拶をしながら座敷に通つた。その樣

社稷
自家撞着

子は、すこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。

さて愈談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、その間に一點の疑念をも挾まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受けします。」と、かういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つことが出來、德川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、「いや、貴樣のいふ事は自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の暴徒があの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。」とか、色々喧しく責め

天空海闊
言うた

立てたに違ひない。さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し、西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達觀する明と、大事に處する斷とをもつてゐた。

その膽量の大きいことは、いはゆる天空海闊で、見識ぶるなどといふことは、固より少しもなかつた。人見寧といふ男が、若い時分に自分の處にやつて來て、「西郷に會ひたいから紹介狀を書いてくれ。」と言うたことがあつた。ところが、段々樣子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行くらしい。そこで、自分は人見の望み通り紹介狀を書いてやつたが、その中に、「この男は足下を刺す筈だが、兎に角會つてやつてくれ。」と認めて置いた。それから、人見

桐野　桐野利秋。陸軍少將。西南の役西郷と共に戰死した。

見よう。

はぢきに薩州へ下つて、先づ桐野に面會した。桐野も流石に眼がある。人見を見ると、その擧動が如何にも尋常でないから、私かに西郷への紹介狀を開封して見たら、果して今の始末だ。流石不敵の桐野も之には少からず驚いて、直接委細を西郷へ通知してやつた。ところが、西郷は一向平氣なもので「勝からの紹介なら會つて見よう。」といふことである。そこで、人見は翌日西郷の屋敷を訪ねて行つて「天下の大勢に關するお話を承りに參りました。」と言ふと、西郷は丁度玄關に横臥してゐたが、その聲を聞くと悠々と起き直つて「私が吉之助だが、私は天下の大勢などいふむづかしいことは知らない。まあお聞き

倫―綸―論

なさい、先日私は大隅の方へ旅行した。その途中で腹がへつてたまらぬから、十六文で芋を買つて食つたものだが、たかが十六文で腹を養ふやうな吉之助に、天下の形勢などが解る筈がないではないか。」と言つて、大口を開けて笑つた。ところが、血氣の人見もこの出し拔けの話に氣を呑まれて、殺すどころの段でなく、挨拶もろくゝ得せずに歸つて來て「西郷さんは實に豪傑だ。」と、感服して話したことがあつた。その氣宇膽力の大きいことは概ねこの通りで、實に絶倫といふべく、議論も何もあつたものではなかつた。

（氷川清話）

西郷隆盛
舊名は吉之助。號は南洲。維新三傑の一人。明治十年歿、年五十二。

事宜

迂遠

二七遺訓

西郷隆盛

事大小となく正道を踐み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦其の差支を通せば、後は事宜次第工夫の出來るやうに思へども、屹度策略のわづらひ生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先に行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出來

驕慢

ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが爲なれば、決して己を愛せぬものなり。

西郷隆盛

過を改むるに、自ら過てりとさへ思ひつかばそれにてよし。其の事をば棄てて顧みず、直ちに一歩踏み出すべし。過を口惜しく思ひ、取繕はんと心配するは、譬へば茶碗を割り、其のかけを集めて合せ見ると同じく、詮もなきことなり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に

困る人なり。されど此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は、天下擧つて毀るとも足らずとせず、天下擧つて譽むとも足れりとせず、これ自ら信ずること篤きが故なり。

天下後世までも信仰悅服せらるゝ者は、唯是一個の誠なり。古より父の仇を討ちし人、其の數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童婦女子も知らざる者あらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。（南洲遺訓）

僥倖

二八 五箇條の御誓文

德冨猪一郎

德冨猪一郎 號は蘇峰。思想評論家。貴族院議員。東京日日新聞社賓。熊本縣の人。文久三年（一八六三）生。

國是

五箇條の御誓文は、實にこれ維新大改革の宣言書である。日本帝國の新時代に於ける第一聲である。過去に於ける三千年の歷史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定したる帝國不磨の寶典である。其の起草者の何人であるかを吟味する必要は毫もない。何となれば、これは一人一個の意見に成つたものではなく、實に時代の一大志望、擧國の一大渴仰を、明治天皇の御名もて、神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものであるからだ。

抑〻五箇條の御誓文は、維新の詔書と同時に成つたもの

紫宸殿　京都御所の正殿。朝廷の儀式を行はせ給ふ所。

で、實に明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて祖宗の神靈に誓ひ、之を中外に宣し給うたものである。

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設し給うた根元である。而して此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

これは舉國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對する天職を遂行することを意味したもの。

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦

マサラシメンコトヲ要ス

此の一條中の主眼は「其志ヲ遂ケ」の點にある。其の志を遂ぐることは、國民の志望を遺憾なく發揮せしむることを意味する。それたゞ其の志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らず。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

これが維新大改革の中樞點である。長き歴史ある國民は、動もすれば其の歴史に拘り囚はれて、其の歴史の最も不必要な部分、最も有害の部分、卽ち過去の糟粕とか、塵垢とか云ふ部分に執着するものである。故に建國の大精神に顧みて之を一洗する必要を生ずる。如何なる家

に於ても、一年に一回、乃至兩回の大掃除は必須である。況や國に於てをや。復、況や其の國數百年鎖國の狀態に停滯したるに於てをや。

茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例・故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て公道と爲す所を、正視闊歩すべきを示し給うたもの。

一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

讀んで字の如し。殊更吾人の說明を要しない。

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

如何にもあり難き思召である。此の五箇條の御誓文は、實に帝國の向ふ所、國民の趨く所を指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案内標である。吾人が維新の大精神に立返れと云ふのは、とりも直さず此の五箇條の御誓文に立返れと云ふのである。

（國民小訓）

次の文の各單語の品詞名を問ふ

世に處するにはどんな難事に出會つても臆してはいけぬ。

「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ」

といふ料簡で行くがよい（一五三頁）

新制國語讀本　卷三　終

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【丿】之久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交京亭亦【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便係促俱俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光克免兎兒【入】入內全兩【八】八公六共兵具其典兼【冂】冊再【冖】冗冬冷凉凍【冫】凍准凌【几】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑【力】力功加勞助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】包【匕】化北【匚】匿【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厭【厶】去參【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴嚢【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀增墨墮壁壇壓壞壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠娼婚婦婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尚【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屈屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峠峯島
峡崇崎崩【巛】川州巡巣
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幺】幻幼幾【广】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廊廢廣廳【廴】延廷
建廻【廾】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張强彈
【彡】形彩彫影彰【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復微徴德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼
情惑惜惠惡惰惱想愁愉
意愚愛感慈態慕慘慢慎
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戸】
戸戻房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
抽招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛採探
控推揚接提換握挿揭揮
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】
斤斥斬新斷斯【方】方施
旋旗族旗【无】既【日】日
旦旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晩晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
暦曇曜【曰】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村東柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔査柩柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機横檄檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌歎歐歡
【止】止正此歩武歳歴歸
【歹】死殊殉殖殘【殳】段
殺殿毀【毋】母毎毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑涙淡淨淫深混清淺
添減渕渡溫測港渇湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漠漢
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犠【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生産甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異畳當疊
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【癶】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉
看眞眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移税程稚種稱稲
稿穀積穂穩【穴】穴究空
突窃窒窓窮【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絶絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線締緣
編緩緯練縛縣縫縮縱總
續繁織繕繪繭繰繼續
【缶】缺【网】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胴胸能脅脈脊
脚脱腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆膺臓【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】與興舉舊【舌】舌舎
【舛】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【艮】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂
茶草荒荷荘菊菌菓菜華
萬落葉著葬蒙蒸蓄蔓海
藏藝藤藥【虍】虎虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜蝕蟲
蠶蠻【血】血衆【行】行術
街衝衡衛【衣】衣表衰袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論諭諸諾謀謁諮謝
謠謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝貞負財貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤賦質賴購贈贊【赤】赤【走】走赴起超越趣【足】足距跡路踊躍【身】身【車】車軌軍軒軟軸較載輕輩輪輯輸與轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰農【辵】辷迎近返迫迭述迷追退送逃逆透逐途通速造連週進逸遂遇遊運過道達違遙遞遠遣適遭遲遷選遺避還邊邂【邑】邦邪邸郊郎郡部郵都鄕【酉】酌配酒酢酬酷酸醉醜醫【釆】釋【里】里重野量【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄錢鍋鎖鎭鏡鑄鑑鐵鑑鑛【長】長【門】門閉開閑間閣閲關【阜】防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊階隔際障隣隨險隱【隹】隻雀雄雅集雇雌雙雜離難【雨】雨雪雲零雷電需震霜霧露靈【青】青靜【非】非【面】面【革】革靴【音】音響【頁】頂項順頓預頑領頭頻題額顏願顚類顧顯【風】風【飛】飛飜【食】食飢飲飯飾養餓餘餅館餐【首】首【香】香【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒驅驗驚驛【骨】骨髄體【高】高【髟】髮【鬥】鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥【麻】麻【黃】黃【黑】黑默點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】龜

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと　（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること　（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと　（四）外來語は假名で書くこと。

文語助動詞連續法

體言	未然形につくもの	連用形につくもの	終止形につくもの	連體形につくもの	已然形につくもの
ラ變	有ら	有り	有り	有る	有れ
四段	讀ま	讀み	讀む	讀む	讀め
ナ變	死な	死に	死ぬ	死ぬる	死ぬれ
上二段	起き	起き	起く	起くる	起くれ
上一段	着	着	着る	着る	着れ
下二段	受け	受け	受く	受くる	受くれ
下一段	蹴	蹴	蹴る	蹴る	蹴れ
カ變	來	來	來く	來る	來る
サ變	爲	爲	爲す	爲する	爲る
花	花	花	花	花	

る　す　らる　さす　しむ　まし　ず　ざり　じ　まほし

けん　き　カ變は特例サ變は・ナ變にはつかぬ　つ　ぬ　けり　たり　たし

べし　べから　らむ　らし　めり　まじ　なり（終止）

べし　べから　らむ　らし　めり　まじ　なり（指定）　如し

り

動詞活用對照表

※「蹴ル」ハ國語ニテハ四段ニモ活用ス

口語

種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行）	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行）	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キ（ロヨ）
	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キ（ロヨ）
下一段活用（ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行）	得	エ	エ	エル	エル	エレ	エ（ロヨ）
	※蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケ（ロヨ）
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	爲	セ	シ	スル	スル	スレ	セ（シロヨ）

文語

種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段活用（カ・サ・タ・ハ・マ・ラ行）	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
奈行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
良行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ
上二段活用（カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラ行）	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段活用（カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワ行）	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段活用（五十音各行）	得	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エヨ
下一段活用	蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コヨ
サ行變格	爲	セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ

形容詞活用對照表

口語

種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
ク活用	高	○	ク	イ	イ	ケレ	○
シク活用	美	○	シク	シイ	シイ	シケレ	○

文語

種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
ク活用	高	ク	ク	シ	キ	ケレ	○
シク活用	美	シク	シク	シ	シキ	シケレ	○

助動詞活用對照表

口語

種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	ル	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレロ
可能	ル	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	
使役	ル	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセロ
尊敬	ル	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	
指定	ダ	デダ	デダ	デダ			
時	タ	タラ	タリ	タ	タ		
	ウ	ウ		ウ			
	ヨウ			ヨウ			

文語

種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身	ル	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ
可能	ル	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	
使役	ス	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
	ム	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメヨ
尊敬	ル	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ
	ス	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
	ム	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメヨ
指定	ナリ	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	タレ
時	キ	ケラ	ケリ	ケリ	ケル	ケレ	ケ
	ツ	タ	タリ	タリ	タル	タレ	テ
	ヌ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
	リ	リ	リ	リ	ル	レ	レ
	ム	ム		ム	ムル	ムレ	メ

文語助動詞連續法

體言	サ變	カ變	下一段	下二段	上一段	上二段	ナ變	四段	ラ變	
花	爲せ	來こ	蹴	受け	着	起き	死な	讀ま	有ら	未然形につくもの
	り								る	
	さす らる								す	
	じ ざり ずまほし						ましむ			
花	爲し	來き	蹴	受け	着	起き	死に	讀み	有り	連用形につくもの
	たし たり				ぬ つ け り		ナ變に はつ ぬかぬ	カ變・サ變は 特例	き けん	
花	爲す	來く	蹴る	受く	着る	起く	死ぬ	讀む	有り	終止形につくもの
	なり 詠歎				らむ らし めり まじ		べから	べし		
花	爲る	來る	蹴る	受くる	着る	起くる	死ぬる	讀む	有る	連體形につくもの
									まじり めり らし むから べから べし	
									なり 指定 如し	
	爲る	來る	蹴れ	受くれ	着れ	起くれ	死ぬれ	讀め り	有れ	已然形につくもの

口語助動詞連續法

體言	サ變	カ變	下一段	上一段	四段		
	*爲し	來き	捨て	落ち	書か	未然形につくもの	
			られる させる よう *まい		れる せる う		
					*ない *ぬ		
	爲し	來き	捨て	落ち	書き	連用形につくもの	
			たい ます				
	爲る	來る	捨てる	落ちる	書く	終止形につくもの	
					まい		
					らしい		
花	爲る	來る	捨てる	落ちる	書く	連體形につくもの	
	だ です (の)だ (の)です やうだ (の)やうだ						

音便

動詞	い音便	う音便	撥音便	促音便
形容詞	咲き|て—い 防ぎ|て—い	問ひ|て—う 甘く|なる—う	死に|て—ん 飛び|て—ん 富み|て—ん	祝ひ|て—つ 持ち|て—つ 知り|て—つ
	青き|海—い			

比況		希望	打消	推量	時	指定	尊敬	使役
ヤウデス ヤウダ		タ イ	ナ ヌ イ	ラシ イ マ	ヨ ウ タ ウ	デス ダ	ラレル レル	サセル セル
ヤウデセ ヤウダラ					タラ	デセ ダラ	ラレ レ	サセ セ
ヤウデシ ヤウダツ		タク	ナク ズ	ラシク	タリ	デシ ダツ	ラレ レ	サセ セ
ヤウデス ヤウダ		タイ	ナイ ヌ	ラシイ マイ	ヨウ ウ タ	デス ダ	ラレル レル	サセル セル
		タイ	ナイ ヌ	ラシイ	タ		ラレル レル	サセル セル
		タケレ	ナケレ ネ	ラシケレ			ラレレ レレ	サセレ セレ
								サセロ サセヨ

比況	詠歎	希望	打消	推量	時	指定	尊敬	使役
ゴトシ	ナリ ケリ	タ マホシ シ	ザリ ズ ジ	ラム ベシ ラシ マジ	タ ケ ヌ ツ キ リ ム リ	ナリ タリ	ラル レル サス セス シム	サス セス シム
ゴトク		マホシク タク	ザラ ズ	ベク マジク	タラ テ ナ	ナラ タラ	ラレ レ サセ セ シメ	サセ セ シメ
ゴトク		マホシク タク	ザリ ズ	ベク マジク	タリ テ ニ	ナリ タリ	ラレ レ サセ セ シメ	サセ セ シメ
ゴトシ	ナリ ケリ	マホシ タシ	ジ ズ	ラム ベシ ラシ マジ	タリ ヌ ツ ケリ キ ム リ	ナリ タリ	ラル レル サス セス シム	サス セス シム
ゴトキ	ナル ケル	マホシキ タキ	ザル ヌ ジ	ラム ベキ ラシ マジキ	タル ヌル ツル ケル シ ム	ナル タル	ラルル レル サスル セスル シムル	サスル セスル シムル
	ナレ ケレ	マホシケレ タケレ	ザレ ネ ジ	ラメ ベケレ ラシ マジケレ	タレ ヌレ ツレ ケレ シカ メ	ナレ タレ	ラルレ レレ サスレ セスレ シムレ	サスレ セスレ シムレ
			ザレ		ネ テ	タレ	ラレヨ レヨ サセヨ セヨ シメヨ	サセヨ セヨ シメヨ

昭和十二年七月廿六日 印刷
昭和十二年七月卅一日 發行
昭和十三年一月十日 修正再版印刷
昭和十三年一月十五日 修正再版發行

新制國語讀本
定價 卷一——卷九 各六拾錢
卷十 各五拾八錢

不許複製

編者 東條操

發行者 東京市神田區神保町一丁目一番地
株式會社 三省堂
代表者 龜井豐治

印刷者 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
株式會社 三省堂蒲田工場
代表者 喜多見昇

發行所 (東京市神田區神保町一ノ一)
(振替口座 東京三一五五五)
株式會社 三省堂
(大阪市西區阿波座下通二ノ六)
株式會社 三省堂大阪支店

新東條國文局

広島大学図書
2000302734
庫
38
734